

翻訳「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」第6章*

E.バイロイター著 山城 順 訳**

GESCHICHTE DER DIAKONIE UND INNEREN MISSION IN DER NEUZEIT

Erich Beyreuther

要 旨

本稿はドイツのキリスト教社会福祉「ディアコニー」の歴史について論述された「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」全10章のなかの第6章、ビスマルク時代から近代の部分である。町はずれの農園の納屋に追いやられるようにして暮らしていた数人の子供たちを助けることからはじまったボーデルシュヴィンク牧師の事業は、ベートルの町を福祉の町に変え、現在約2500人の利用者と約2500人の看護師、またその家族や関連のスーパーマーケットや郵便局、大学をもつ町全体が福祉の町となった「ベートル」について述べられている。それがキリスト教社会福祉を率いた親友シュテッカーと共にドイツの国を福祉国家へ築いていく過程が力を入れて記述されている。「ベートル」については2005年本学で講演をされた北海道「ベテルの家」施設ほか、病院、教会の名前で日本でもよく知られている。

キーワード

ビスマルク、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク、アドルフ・シュテッカー、フリードリヒ・ナウマン

第6章

目 次

ビスマルクの時代と、1914年までの帝国におけるディアコニーと内国伝道

1. ビスマルク時代、ヴィヘルン辞任後の中央委員会
2. フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク (1831-1910)
3. アドルフ・シュテッカーと反教會的ベルリンをめぐる闘い
4. キリスト教社会福祉フリードリヒ・ナウマン
5. 第1次世界大戦にいたるまでの内国伝道の発展

ビスマルクの時代と、1914年までの帝国におけるディアコニーと内国伝道

1

ビスマルク時代

ヴィヘルン辞任後の中央委員会

ヴィヘルンは重い病気になりハンブルクに帰った。そこで中央委員会は新しい指導者を選ばなければならなかった。ヴィヘルンから受け継いだ財産を誠実に守り、増やす、とりわけ新しい時代に合わせる事が大事だ、ということは、皆の一致した思いだった。ドイツにおける、内国伝道とディアコニーの広範な活動を、すべて一つにまとめることは容易ではなかった。活動分野の変化のすべては、この中心的な役割を忠実にうつつだしていた。中央委員会の歴史は、実際に濃縮したかたちで、国民全体の中で、また教会内部で、内国伝道とその事業を選んだ広い道を、1914年に第一次世界大戦が始まるまで、歩いた。

辞任したヴィヘルンにかわって、白髪の名譽會長ベトマン・ホルヴェクが、1877年7月14日に亡くなるまで、中央委員会を指導することになった。1877年以後のほぼ10年間は暫定的な解決に努力した。1886年、ベルリン大学神学部で新約聖書の講座をもっていたD.ベルンハルト・ヴァイス教授が新しい委員長になった。偉大で天才的な人物が委員長の座に着く時代は過ぎていた。[1]

いまは、中央委員会の中に、神学者が圧倒的に多いことが、適切な発展をさまたげていた。ヴィヘルンの時に、ヴィヘルン自身を神学者の中に数えると、神学者でない人が12人、神学者が13人と相対していた。それが1890年には、28人の神学者がいて信徒は15人だけであった。牧師と牧師候補者は共同責任を負う信徒の中にほとんどいなかったのである。ベルリンのいくつかの省の高級官吏は、当局の役所の先端でもはや指導力を失っているのに自由な地位を占めていた。

* Received December 5, 2006

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

実施された**寄付行為の変更**は重大なことであった。古い目標：「霊的・肉体的な困窮からの、福音による国民救済」は、単純な決り文句に替えられた。中央委員会は、「福音主義のドイツ内部で、また外国で生活しているドイツ人のもとで、内国伝道の奉仕を通して神の国建設に尽力するという目標と課題」をもった。

フリードナーの**救護思想**が生彩の無い目標に譲らなければならなかったことは、カイザースヴェルトでも同じ様におこった。[1*] 冷静な第2世代は、福音伝道の力によって全国民が生まれ変わるといような熱狂的な期待とは決別すると言った。内国伝道は、教会の命があらわれているとは思われなくなった。

教会の自覚がつよくなると、中央委員会は、「福音伝道活動を避けている国民生活の領域で、キリスト教慈善事業を活発にし、孤立してなされている、こうした努力を互いに結びつけ、助言と行為をもってかれらに仕え、福音伝道を再開するように特別な努力をしよう」と強調した。[2]

福音伝道は活発に熱心に行われ、「他の活動に頼ることは意図的にしなかった」。また、活動を引き締めようとするのも、「すべての慈善事業を集中的に管理すること」も彼らは好まなかった。内国伝道の個々の領邦連盟とその地方の委員会とは、どうしても親しくなろうとはせず、自分独自に行おうとした。人はヴィヘルンから遠くはなれてしまったことを不安に思うようになった。

同じ時に、**カトリック教会**は、明らかに反対の道を行った。彼らは文化闘争の経験をもとに、まず報道組織を強化し、厳格な中央の指導をやめなかった。彼らは1865年に20の新聞をもっていた。それが1878年には271になっていた。彼らはカトリックの人々を、始めたばかりの会の活動の中に一人もれなくしっかりつなぎとめた。彼らの総会である**カトリック大会**はすばらしい展示をするようになり、支持されたスローガンを打ち出した。そこで領邦教会の弱さをいたわって、慎重に「提案」されただけではない。「慈善的-社会福祉中央連盟」、強力な「カトリックドイツ国民会議」「カトリック婦人連盟」の3つと、1897年以降の「ドイツ・カトリック・カリタス連盟」は一つの親密な事業体に合併した。また、それぞれの階級の人たちはみな、その使用人になったり、職能協会に入るようになった。[2*]

領邦教会とその牧師たちの内部で、内国伝道に対する姿勢にある種の変化がはっきりあらわれ

た。子ども礼拝と少年労働は、はじめは内国伝道の地域共同体の牧師たちの協力なしに、単独で行われていたが、それは徐々に変わっていった。例えば聖書の時間のように、内国伝道が自発的にはじめたことは、今は牧師たちが再開している。

個々のディアコニー職、もしくは教区監督が担当する地域共同体において、牧師は、徐々に内国伝道の課題をになう専門担当者になっていった。内国伝道は国民的なものとなった。人は、教会民の中で、特に、非常の時に変わりうるということを知った。

中央委員会の人たちが教会当局者たちをむりに引っぱっていくようにしなかったことは高く評価される。彼らがかつて、メンバーに入れた**アドルフ・シュテッカー**のような闘う人たち、また**フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク**のような窮屈な勧告者たちは、どんなときにも誠実であり、例えばベルリンのプロイセン最高宗務会議のような統治と王冠の洪面の前では、よく働いたり謙虚にふるまったりはしなかった。

中央委員会は特別なストレスをがまんしなければならなかった。中央委員会の経営は、ヴィヘルンの親しい協力者で報道の才能にたけたユダヤ人の血統をもつ**フリードリヒ・ザロモ・オルデンベルク**牧師が行っていた。彼は**編集責任者**として、かつてヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンが魅力的に編集した『**フリーゲンデンブレッター**』（「速達新報」）を出版した。彼は**とても不安そうに**、古くから変わらない内国伝道の活動路線を守り、彼が理解していたヴィヘルン好みの思想の不屈の支持者であって、それ以外のことを望まなかった。**変っていく委員会の良心は、社会問題の中でボーデルシュヴィンクやシュテッカーのような他の人たちのものになった。**

そこでかつてヴィヘルンが始め、ほとぼしる刺激をもっていた『**フリーゲンデンブレッター**』は活気に満ちたものになり、中央委員会の正式の機関誌になった。そうこうするうちに、1876年以来、「ディアコニーと内国伝道の月刊誌」に新しく効果的な専門機関誌が生まれた。ヴィルヘルム・レーエの重要な提案を受け入れた、アルトナー・ディアコニー施設長**テーオドア・シェファア**牧師は、それをもって告白ルター派教会の方向を内国伝道の内部でより重要なものと認めさせようとした。[3] シェファアは内国伝道を次のように規定した。「それはまさに、慈善事業を、福音の自由な告知と同じように、教会の生命に植えつけ、効果

あるものにし、教会の内的状態をよいものにしていく、19世紀の教会の改革運動そのものである。」[4]

この**新ルター派**は、人を回心させようとするだけで、危険に陥ると安泰であろうとし、大事な時に肝心なことに触れず、些細なことばかり話した。ある種の不安気で反動的な動きは、そのことと結びついていた。外的には非常につつしみ深くみえるルター派教会の内的なすばらしさが向かう高い目標は、実際に達成できなかつた。[5] だがこの危険は脅威となった!

中央委員会は、ルター派教会のグループがしっかり守り、オルデンベルクの不用意な表明によって生じた理由のある懸念を取り除くことに成功した。ヴィヘルンが成功しなかつたことがいま始まった。1875年10月のはじめ、ルター派領邦教会は**ドレスデン**で内国伝道会議を開催することができた。これまで中央委員会の集會と一緒にしてきた教会大会はその間休会になった。カトリック教会はそれをドイツの中に力強くまた印象深く拡充したが、プロテスタント教会は教会大会を眠りにつかせたのである。そこで**教会大会なしの中央委員会の大会**が初めて単独でドレスデンで開催された。その時出席者は60%を下った。ハレでは、1827年最後の教会大会で約1200人の出席者があり、ドレスデンではかろうじて500人が出席した。だが、この損失はやがて取りかえされた。とりわけ、主題講演と特別会議が区別され、自由な夕べの催しを広く世間に呼びかけ、非常によいものになった。

実際に活動は困難であり、内国伝道の活動は全教会の実践的・牧会的働きであるとヴィヘルンがいった意味で、福音主義の全ドイツを揺り動かした多くの実践的・教会的課題を、中央委員会の努力の中心においた。ドイツ・プロテスタント教会の中で連帯しようとする機運は、教会連合がなかつた時にすべての領邦教会の境界を超えて生まれ、本質的なものになった。

社会問題は、思ったよりはやく、労働者階級の視点から再び焦点となった。1878年5月11日、板金職人の親方**ヘーデル**が、華やかな大通り「ウンター・デン・リンデン」で暗殺しようとした**白髪の皇帝ヴィルヘルム1世暗殺**事件が起つた。ピストルの弾は目的を達成しなかつたが、世間は非常に興奮した。ビスマルクはこの件を、彼が長い間準備し、事務機の引き出しからとりだしさえすればいいだけにしていた法案を帝国議会の審議にかけられる機会として、利用した。それによって社会民主

主義の宣伝は壊滅的な打撃を受けるようになった。それでも帝国議会の自由主義者の多数は法案を認めなかつた。だが、1878年6月2日、無政府主義者**ノビリング博士**は老いた皇帝を射つらぬき、考えられない年月、重大な負傷を負わせた。その時「鉄の宰相」が登場した。

わずらわしい帝国議会はあつという間に解散された。保守的多数派となった新しい帝国議会は、1878年10月21日**社会主義者鎮圧法**を可決した。「社会民主主義・社会主義・共産主義が、既成の国家と社会秩序を転覆しようとする」すべての会は禁止された。集会禁止が続き、印刷物の配布と分担金の徴収は禁止された。この法律は採決を3回延長され、1890年まで保持された。

ビスマルクは、主にカトリック教会に反対して文化闘争を導入したが、反対に教会を強くし力をつけさせただけとなり、ここでも同様に、まったく過ちをおかした。**社会主義者鎮圧法は非常に大きな損害をもたらした**。1890年まで、法律によって322の新聞を禁止し、900人を国外退去にし、1500人を有罪にしたことは、いったい何を意味していたのか? こうした弾圧は、むしろ労働者大衆を扇動する指導者たちをかり集め、彼らをいっそう親密に結びつけただけのことであり、今まで組織された労働者階級の多くはまだカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスが言う意味で完全に固まっていたのではない。彼らはむしろブルジョワ階級の左翼自由主義者との関係を、とりわけ南ドイツと西ドイツで得ようとしていたのである。[6]

しかしながらベーベルの著書『**女性と社会主義**』は、社会主義者鎮圧法のおかげで強い影響力を持つようになった。その本はひそかに印刷され、配布された。それは労働者階級のメシア的使命感をよみがえらせ、彼らにすばらしい将来を約束した。しかし、キリスト教に敵意をいだいているこの本の中で、ドイツの少女労働者と婦人労働者の状況についてなされているありのままの報告は、さらに強い感銘を与えた。ここに集められたものは、とてもひどいものであった。しかし、ベーベルは高い身分の人の罪もおなじように負い、この報告に真実のしるしをあらわしている。また公共生活の中にある汚れと低俗に対する彼らの誠実な闘いにも、ベーベルは大いに共感を示したにちがいない。[7]

だがオルデンベルクは、『**フリーゲンデンブレッター**』で何を報じようとしたのか? 彼は、社会

主義者鎮圧法が直接間接によいものだというすべての意見を明らかにした。彼は政府に隷属する人たちの態度にひっぱられて、『フリーゲンデンブレッター』が実際には**社会民主主義に反対する闘い**になっていくことを認めた。オルデンベルクは、内国伝道のそれぞれの会の中に「社会民主主義と闘う会」があるのを目にしていたヴェストファーレンの牧師ハルペの反論なしの命題を、受けついだ。(1875) [8]

だが中央委員会は、1877年の時点でそんなにはっきりしていたわけではなかった。「私たちは社会民主主義者対しては暖かい友であるが、社会民主主義者に対しては確固たる反対者である」と。しかし、中央委員会においては、実際には、わずかな緊急の労働者の問題についてなされる簡易宿泊所の要求や、オランダを往来する人や、鉄道労働者のような労働者階層の特別なグループによってなされる教会福祉は、制限された。その点での「労働者問題に関する」彼らの貢献は、あったのである。

1880年以來の社会主義者鎮圧法と親ゆび締め
の拷問用具の時代のただなかで、同じ種類の施設、あるいは自由協会の連合を意味する異なる**専門分野の連合**が次第になされた。ここから共通の業務のなかで経験したことについて活発な交流、相互の提案と計画が始まった。この労働分野、専門分野、そして活動分野にしたがって構成されたものは、続く10年の経過の中でなおさまざまな変遷をたどった。しかも、それらは強固になり、また同時に「中央委員会の中に活きた統合を保ちつづけてきたところの、互いに緊密なつながりをもつ繊細な生命組織を形成した。[9]

確かに、状況は社会主義者鎮圧法がある以上中央委員会としては容易ではなかった。中央委員会は**日曜日の休日**をあきらめずに主張したが、つまらない拒絶を何度も甘受しけなければならなかった。プロイセンの通産大臣アシェバッハは、例えば、日曜日を休みとするために、また鉄道の物流を日曜と祝日には減少することを求める陳情を、1876年に拒絶した。それと同時に、営業法の変更は、手工業主と工業主が「徒弟期間修了者、徒弟、また労働者を日曜日と祝日に働かせてはならない」という請願(1877年)を、約3万2千人の署名をつけて、帝国宰相と連邦参議員に提出された。しかし帝国議会は1878年にわずかに青少年の日曜労働禁止の通達を出しただけであった。

ライン-ヴェストファーレンの工業社会は、議

会において、すでにヴィヘルンの時代に、日曜労働のどんな制限にも反対し、どんなに激しく突き進んだことだろう。だが、ここで中央委員会はヴィヘルンの遺言に忠実にとどまった。その遺言は、1871年10月10日に公表された彼の最後の公的な発言で、「いわゆる保守的な経営者は、自由主義経営者も同様に、自分の過去のあやまちを責めるべきである。またほかの非常に多くの問題に罪があるように、たとえば利己心、貪欲、そして利己主義が両者の党の全体に同じようにあるということも責めるべきである。家族はじっさい真の日曜日によって生きるのである」[10]

結果は期待したようにはならなかった。1885年、政府がアンケート調査を行った時、日曜の労働は全工場の半分だけが行っていた。ここで内国伝道がたゆまず行ってきた活動の影響を過小評価することはできなかった。1889年、中央委員会は、もう一度日曜休日の陳情を行った。1891年、国はついに日曜労働禁止の通達をだした。

中央委員会は、オルデンベルクが『フリーゲンデンブレッター』で忠告した、あの純粋に否定的な態度から、ビスマルクの社会改革事業によって、肯定的な協力者に呼び戻された。中央委員会は、そのことを適切に理解し、社会政策の優れた専門家の協力を確保した。中央委員会は、プロイセン通産省で上申委員をしていた**テーオドア・ローマン**を、彼らの議員に選んだ(1880)。1881年からローマンは、ビスマルクの2年半のために、彼がドイツ帝国宰相にとってじゃまになるまで、社会改革の熱心な協力者になった。健康保険事業は彼の重要な事業となった。[11]

健康保険法は1883年6月15日に成立し、**疾病保険と老人保険**に関する法は1889年6月22日に公布された。**傷害保険法**は1884年6月6日にすでに確定したものを交付した。だが、ヨーロッパの模範となるこの社会福祉法は、社会主義者鎮圧法の不幸な影の部分に置かれていた。社会福祉法は強制された恵みとして、憎まれている権力の手から来ているので、労働者階級を不機嫌にするだけであった。ここで、労働者階級にとって模範的なことがなされたのに、それは闘いの騒音にかき消された。

テーオドア・ローマンはその時、官職を辞職し、それからは社会福祉の経験をいかして中央委員会で自由に働いた。彼は、彼の計画をヴィヘルンとフーバーによってくわしく説明し、中央委員会はそれを自分のものにした。それはここで生まれた

聖書的思考の基礎を展開したもので、まったく成熟した、よくまとまった論文であった。ローマンは、資本家を寛大に扱わず、神の前で責任を意識しない、世俗的・唯物論的な実生活の正体を、暴露した。彼は国の援助と労働者の自助と内国伝道の同朋援護の関係について古い考えをもっていた。

そして、なお時代遅れになった観念に固執したという点で、彼の計画全体は病んでいた。ローマンは資本家を、彼の騎士領において一大農場主がキリスト教の伝統によって悪いときも良いときも農場労働者とその家族を誠実に気遣い、すべてが互いに一つの大家族を形成した—そういう責任をもった貴族の古い理想像に例えた。ローマンは、この良き父権制の状況が、地方で広く（問題を）解決していくようには思えなかった。他方、産業の中で定着していた社会学的・社会政策上の様式は、決して農園経営と比べることはできなかった。[12] ここにはもう一つの原則が重要であった。[13]

誠実に考えた試みから、成果は与えられなかった。彼は現実の状況について肝心なことは言及しなかった。この方法では内国伝道は労働者階級との信頼関係をつくりだしたり、その運命を改善することはできなかった。内国伝道に助けを求めた人はひどい扱いをうけねばならなかった。なにしろ、実行する力と粘り強いエネルギーが中央委員会に欠けていたのである。内国伝道中央委員会は、すべての面で提案しようとしたが、そのために粘り強さをもって勇敢に闘ったり、場合によっては苦しむこともしなかった。結局、内国伝道中央委員会は十分に独立しているのではなく、国教会のように、国の成り行きにびったりくっついていた。

社会主義鎮圧法の時代に、超党派で社会問題になおうというこのよびかけは次第に消えていった。ローマンが1884年に出した陳情書は、中央委員会によって「**産業に関する教会と内国伝道の課題と今日の社会闘争**」というタイトルで、数千冊に印刷されて、内国伝道のすべての会、牧会者会議、新聞、政府のメンバー、ビスマルク自身、帝国議会の議員たち、そして社会福祉問題で協力をする、全ての公共生活をする人たちに配布された。だがすべては変わらず、過去のままであり続けた。それはあまりにも学問的で、なんらかの義務と結びついていなかった!

ここで、1918年ドイツ帝国崩壊に至るまで中央委員会と内国伝道が努力してきたすべての真の悲

劇的なものが明らかになった。人は心温かく、そして慎重に、時代の激しい問題を明らかにし、その問題を避けることは絶対にしなかった。それが明らかになって適切な方針が出された後、まさに力強く取組み、さらに磨きをかけて管理をしてきたのである。

このことは緊急の社会問題に対してだけ起こったのではない。そうではなく、その当時はじまったばかりの内国伝道のように、教会が盛んに取り組んだ**福音伝道運動の問題**の中においても同様に起こった。ドイツの南と西において、1884年以来、自由福音伝道者として偉大な成果をもつ**エリアス・シュレンク**が、まずブレーメン、フランクフルト・アム・マインの町で、またカッセルで福音伝道を行った。他の場所は別として、数千もの反キリスト教の人たちが、借りたホールで、実際に聖書を伝え、ついには広々とした都市の教会に移動し、そこで人々は息をつまらせるように聞き入った、福音伝道のこの先駆者は教會的に成功した。

この偉大な福音伝道者の活動は、何度もおこなわれた都市伝道と内国伝道とはもう一つの活動分野をはじめの第一歩となった。例えば、カッセルの教会当局のある人が言ったように、「カッセルで実際にキリスト教的生活をしているほとんど全ての人は、シュレンクの福音伝道で戻ってきた」のである。[14]

エリアス・シュレンクのあとに、ボンのクリストリーブ教授が立った。彼はそこで1881年にすでに「福音伝道協会」を創設し、福音伝道学校として「ヨハノイム」を設立した。ここでエリアス・シュレンクは、必要な援助者、共に闘う同志、そして後に続く弟子をもつ偉大な福音伝道者となっていった。既成教会の牧師との協力は、はじめから考えられていた、また反教会の多くの人たちのなかで、彼らと共に活動をおし進めようとした。福音伝道活動の150年の経験に対して、アングロサクソン人の国々では、まず最初の経験を収集し、そして慎重に前に進まなければならないということが、はっきり認識されるようになった。

だが、この福音伝道運動は、たちまち、牧師たちの不信と敵対の壁に直面した。この問題は、中央委員会カッセル会議（1888）で公に協議することになった。セルの講演「神の国における信徒の活動、その必要性和その制限」は事柄を公平に扱っていなかった。「**満ち足りた精神** (Geiste zufriedener Sattheit)」のなかで述べられたテーマは、「内国伝道が、教会を離脱しようとしている人たちを、

教会に忠実に組み込んでいく方向において、完成するしかない」という考えによっていた。「今日重要なことは新しい組織が必要なのではなく、共同体援護を組織するために、準備ができたすべての力と組織が自覚的に統合することが必要である」。これは福音伝道のひそかな拒絶を意味したが、よりによって、カッセルの地で、そこで、シュレンクの活動の成果は、教会共同体のキリスト者の生活が強められていることをはっきり示した。[15]

なお、内国伝道のふところに福音伝道を受け入れようとする問題は、多くの個別の会議の中で、中央委員会を動かした。ついに時代が「神の言の特別な宣教」を必要としているということが認められた。福音伝道運動は、内国伝道の「当然の仕事」として、接手をうけた牧師がみずからもう一度加入するようになるまで「応急処置」としてながい間行われなければならなかった。

そうこうするうちに、福音伝道運動と福音主義改革運動の部門は独立した。中央委員会はたしかに、福音伝道によって、内国伝道の小さな労働者の多くのグループが新しい活力をうけているというようには見ないで、信仰に覚醒し勝利した協力者は、奉仕に甘んじ、これまでのやり方にとどまっていた。せいぜい多くの原則を強調したり、経験をとおして適切な考えを友好的に求めて、待ち、観察し、試みて、好意的に思い、共感するのであるが、有効な手助けや協力はなかった。[16]

そう、専門誌はドイツにおける福音伝道の発展について辛抱強く沈黙を守ったのである。ヴィヘルンは『フリーゲンデンブレッター』が伝道者の生活のどんな小さな活動も誠実に記録し、それが励ましとなることを喜んでいて、いまや内国伝道の要職につき、編集室にすわり、「非常に控え目に、おそらく途方にくれた様子で待っていた」中央委員会の書記、ラーレンベックのような重要人物は「まさに拒絶した」のである。告白主義者テオドア・シエファァーは記念祭の講演「半世紀の内国伝道」でさえも、福音伝道運動の友とのはっきりした清算のために用いた。だが彼が福音伝道活動を描いた絵は、ゆがめられ、正しいものではなかった。福音伝道運動はいくらそうしたくても、その点が再認識されることはなかった。

すでに内国伝道のひざもとで運動していること、あるいはそこで起っていることしか知らないという狭さは、いくつもの真の神学的また宗派の不安を広げた。人は、困窮を全体の中に見ないまま、十分に活発であったし、ある種の相違をこえ

たおおらかな協力を呼びかけ、その偉大な神学的深さによって、活発に友を得ようとした。[17] 1896年のアイゼナッハの教会会議と1897年のプロイセンの総会でよい出発をしたにもかかわらず、教会離脱が起こったように、**福音伝道運動を内国伝道のひざもとに受け入れることに失敗した。**福音伝道運動の一人の友はダムマンが「光と生」で言っているように、激しく反抗した。すなわち「教会の保証を求める時はいつも、また不安だけが頭に浮かぶ時はいつも、牧師はその職の中でわずらわしくなるであろうし、その時は人々は考えを変え、混乱をひきおこすことになる。思うところに吹く霊が活動する余地を一度も与えられないならば、思想が信仰を失った10万の魂に向かって心を震わせることが一度もなければ、その時、福音伝道と共同体援護について協議することはふさわしくないし、また役に立たない。」[18]

教区総監督カフタンは、当時すでに広く反キリスト教であったシュレースヴィヒ-ホルシュタインで、よりもよって次のように主張した。「ルター派教会は、それが特別な国民伝道対策をなし得ない以上に、(礼拝、牧会、そして儀式)という手段をもって、離脱者にこれまでよりよく近づいた。」[19] そこでなお、1911年12月15日、キールの長老会はベルリンで、プロイセン領邦教会のなかに「信徒が説教壇から宗教的講話をおこなっているところがあるかどうか」を問い合わせた。カフタンのベルリンの兄弟ユリウスは「福音主義上級評議会の意向は否である」という、安心させる答えをさせた。[20]

福音伝道運動は、自由主義者、告白主義者、また教会の内国伝道の人たちを、内国伝道の中にうまく取り入れ、また、教会離脱を防止した。**福音伝道運動は、福音主義教会の内部で、全体教会の中ではなく、牧師の友人たちの間だけで、その市民権をなんとか保っていた。**ほんのわずかな福音伝道者の中のサムエル・ケラーは、エリアス・シュレンケに歩み寄り、ドイツの国はいまや誰もが福音伝道者になろうとしない唯一の国であるという彼の古い訴えが正しいものと確認した。[21] また、福音伝道の才能であるカリスマ的なものは不十分にしか発揮されなかった。

中央委員会は慎重で控えめな態度を変えておらず、中央委員会には必要な事務職員と秘書が、神学の臨時雇いのように、足りなかった。そこで、1887年から1896年まで中央委員会の委員長だったD.ベルンハルト・ヴァイス教授の議長の下に、

その弟子たちの中から後に国の保健局長となった
オットー・ゲーベル、1907年産業界出身で商工会
長ジューメンスとハルスケ、そしてA.G.ジューメ
ンス-シュッケルト-ヴェルケ、フリードリヒ・アル
バート・シュピッケルが委員長となってあとを継
いだ。

時代の要求の背後に、残念ながら取り残された
ものとの関連で、おなじように19世紀の全体を通
して**移民の困窮**がずっと未解決の傷のまま残って
いた。移民の自由の問題は、フランス革命の影響
を通して、ヨーロッパの国々の基本的人権の中に
入り口をみつけた。**1831年から1900年までの間に、ぎりぎり500万人のドイツ人が主として北アメリカに移住した。**

イギリスの植民地支配が終わったあと、北アメリ
カでは、すべての市民の自由と思いがけぬ科学
の発展の可能性をもつ新しい国が姿をあらわして
きた。ヨーロッパの移住者たちにとって、門は未
来の国にむかって広く開かれるように思われた。

ドイツで起こった1848年の革命の後「暗黒の
反動」と自由を求めるすべての者の追放がおわり、
100万人の「民主主義者」と「48人」がドイツから北アメリカへ移住した。1873年にドイツで大量の労働者解雇と突然の労賃引き下げが始まったすぐ後に、巨大な一団がつづいた。1881年にビスマルクの社会主義者鎮圧法は20万人をこえるドイツ人をアメリカに追放したのである。

保障された移民の自由は、この対応を未解決の
ままにした。ドイツの国々はここで一部無関心に
振舞った。貧しくなって追放された人たちがいつ
も歓迎されないということはなかった。人は飢え
の苦しみから解放された。港湾都市での実際の援
護は、十分でなく、渡航の間じゅうなされなかつ
た。また外国における法律上の助けがなかった。

ドイツ福音主義国教会は移民の数を心配しな
いようにしていた。国教会は明確な課題をもった
が、かれらの限界を国境で知った。このことから、
純粹に伝統的、保守的、また父権制的なものとな
っていたドイツ福音主義教会の特殊な構造がは
っきりした。**この大きな移民運動は実際には殆ど知られていなかったのである。**小教区から排除
する者は視野を失う。別れの礼拝、あるいは最後
の晩餐会の催しがあってもよさそうなキリスト教
共同体であるのに、そこから刺激を受けるような
著しいことは起こらなかった。移民する人たちは、
人に知られることもなくひっそりと消えていっ
た。

それに対して、移民に対する人間的、社会的、
国家的な計画と努力がいっぱいふき出し、世間で
読まれる文学が生まれた。その強い関心が国民的、
人間的な気持ちを持った市民を動かした。

だが、**信仰覚醒運動も同様に移民への道**を見い
だした。このことはバーゼルのドイツキリスト教
協会の内部にはすでにあった。1815年に設立され
たバスラーミッションは、ロシアに移住するドイ
ツ人家族の世話をした。1828年に設立されたライ
ン宣教団体は1837年ヴッパータールに「北アメリ
カ福音主義ドイツ人キリスト教協会」を創設した。
ヴィルヘルム・レーエとヘルマンズブルクの偉大
な国民説教家ルイス・ハームス（1808-1865）は
ルター派のさまざまなグループと同様に、移民の
世話をした。ヴィルヘルム・レーエのアピールは
1850年まで62名の牧師を派遣した。ベルリンミ
ッションはケープタウンに移住したドイツ人等々
の世話をした。

ここで示された移民への活動は、さまざまな会
と団体のなかで、1849年に出版された「ドイツ国
民への覚書」で**ヴィヘルン**を知った。

目指すべき活動目標は、最終的には福音主義教
会のまわりに、純粹な神の言葉を正しく語らない
人たちがいなくなることであり、即ち、ふさわし
い方法で聞き、聞いて自分にあらわれるチャン
スを見出すことであり、またそれがなくても求めて
チャンスを見出すことである。[22]

彼は大声で訴え、「ほかの土地に移住する者、
ほかの土地に去る者たちはキリスト教学校と教会
を伴わないでは決して移住すべきではない……
祖国を離れて他国に移動した子ども
たちが精神的に失うものは、(人口過剰を避けて)
移住をして物質的に得たものより以上に、限りな
く大きい」と言った。

彼は外国に移住した人たちの外面的な困窮を正
しく知らなただけである。彼はロンドン、パ
リ、マルセイユにいるドイツ人労働者たちが共産
主義無神論者たちによってなおも脅迫されている
のを見ており、また、北アメリカで「**最も救いが
たく軽薄で、もっとも過激なドイツ人の不信仰**」
に驚いた。彼はレーエがブレーメンで組織したよ
うに、移住した人たちの中で、アメリカの教会の
つながりを通して啓発するような、徹底的な牧会
と、聖書と文書の頒布を考えた。彼は「イギリス
とアメリカの非常に多くの船で行われていたよ
うに」渡船での船上礼拝をしようと思った。

ヴィヘルンは行動を開始した。1844年から1851

年まで、ラウエスハウスから最初の新しい兄弟たちが、北米のそれぞれの教区に居留民説教者として送られるようになった。実現されなかったが、ピッツバーグの兄弟の家の創設も試みられた。内国伝道の仲間内では1832年に設立された-それはドイツ・プロテスタントの信仰覚醒運動から直接に生まれたものではない-最初で最大のグスタフ・アドルフ協会との親密な協力がうまれた。

手工業に従事する青年、日常的にオランダ国境を往来している人、ハーフェル地方でリピッシェンレンガを焼く労働者、新しく建設される鉄道労働者と運河労働者、ドイツ保養地の湯治客たちの、**移動する人たちすべてを牧会する**という基本思想のもとで、移民援護が中央委員会の努力に組み込まれた。

ヘッセン政府は、ヴェッテルアウで増加してきた、毎年エージェントに誘われてカリフォルニアへ行く、いわゆる**踊り子たちの**乱れた状態を、中央委員会の指示にしたがって阻止するようになった。[23] **船員伝道の開始**がつづいて起こり、「この感謝に満ちた全ての伝道支部」がハンブルク、ブレーメン、アントワープ、ロッテルダムで、フル、リヴァプール、そして海峡沿いの国で続いて生まれた。

そのための**河川の船員援護**と、全地球の外国の港にいるドイツ人船員への牧会的追跡的援護という与えられた任務がなされた。

だが10万人の故郷を離れたドイツ人移民たちの場合、その背後でわずかな友人仲間て祈りをささげて行う努力は**焼け石に水**だった。[24]

そのことに関して、1852年にアイゼナッハのドイツ福音主義教会会議が移民援護をはじめようにした、友好的で気遣う態度は事態を何も変えることはなかった。福音主義教会がその招聘された教会指導者によって、数100万人ものドイツ人移民たちに半世紀の間に出来たことは、ささやかなものであった。[25]

心配になっている大きな困窮が、もう一つの分野にあった。ドイツから追い出されて裸になった数10万人もの困窮者たちが、**ドイツの国と領主に対して懐いている恨みは、国教会とその牧師たちもその反感の中に巻き込んだ**。

ヴィヘルンの偉大さと意味はなんら変わることはなかったが、ここでは、内国伝道とディアコニーのこの先駆者は、その実践行動において保守的・君主的、またキリスト教国家思想を強めることにとらわれていたのであって、そうした影響を

抑止しなければならないという、彼の限界も示した。また内国伝道中央委員会の人事構成において、ヴェトマン-ホルヴェクやシュタールのような主要な人たちはプロイセンに生まれつつある保守党と親密な関係にあった。彼らは1848年の革命におけるヴィヘルンのように、下からの、国民からの、国家を改造しようとする反キリスト教の、またサタンのあらゆる奮闘を見た。彼らは、すべてはからだと生命に対して、物質的また精神的の所有、名誉と礼節に対して、すべての犯罪行為がそこからなされる「国全体に対する全般的な犯罪行為とみなした。」[26] このヴィヘルンの言葉は1848年の革命に対して語られた最も激しい言葉に示されている。無信仰に対する挑戦の言葉は、すべての立場と政党に向けられていて、ヴィヘルンも常に超党派の立場の高さを保った。そして、この事実はただ単に「**政治的理由で移住するドイツ人の100万人の群れの大部分に対して、教会的・宗教的、面談をして問安する可能性を**抑止した。」[27]

彼らの教会によってはもう理解されない100万人の群れとなったドイツ人移民は、放任され、ドイツ宗教改革の母教会との関係を失い、多くはアングロサクソンの信仰覚醒した教会に吸収された。だが、彼らは、それぞれに努力して、弱い力によってドイツの教会を援助し、国外に福音主義教会を創設し、後半世紀の初めと、あとで、再生したドイツ教会とその神学との生きた関係を保った。

内国伝道中央委員会が後に取り残されていく状況の全体を正しく見るならば、委員会と内国伝道が運動全体として認識して行ったことを、大きな全体像の中でみなければならない。なおドイツ領邦教会は国家と結びつき、明らかに社会的に消えていく社会階層となり、ブルジョワ化した。ここで広範囲な活動を目指したのであるが、そのすべての目標に対する厳しい妨害があった。教会と教会民は、急速に自由な歩みを始めた国について行けなかった。内国伝道運動の実質的な具現としての中央委員会は、無数の系によってブルジョワ化し、保守的な気分をもつ教会とつながった。ただ、内国伝道とディアコニーの内部で男女が計画し語り実現しようとしたことは、たいして大きな刺激もない恥かしい並の教会から、際立っていた。内国伝道と外国伝道のために、自由な奉仕のために柔軟で献身的で信仰深い仲間が領邦教会の中に集まった。彼らはすべて手痛く拒絶されたにもかかわらず、国庫財産を受ける情け深い教会のただな

かですますますひどくなる非キリスト教化に直面して、不安であったし不安であり続けた。彼らは、教会の自己満足について驚きの目で見、新しい分野に思い切っただけで、嵐と攻撃に身をさらした。

彼らは悪戦苦闘した困窮から出て、工業労働者と100万人のドイツ人移民の方に向かって進んだ人たちのため精神をめぐる二つの大きな闘いに、当時は勝てなかった。

なぜ大陸での発展が、とりわけドイツにおいては、他のアングロサクソンの国より以上に完全に進み、教会とキリスト教と、そして労働者の間に、ひびが入らなかったのか、すべてははっきり述べられねばならなかった。19世紀に教会から見捨てられた極貧の子どもたちについてのヴィヘルンの痛みを忘れてはならない。

だが、このことは世紀の変わり目に向かう福音主義国教会の複雑な姿の一つの面にすぎなかった。私たちはドイツ福音主義領邦教会の下で、国当局と強く結ばれているプロイセン領邦教会の場合も同じようにすべてを否定的にだけ見てはならない。教会政治の状況は複雑であった。大学の神学は卒業後分解された。全般的に、神学的状況の中にある内的な不確かさは教会指導部の中に反映された。中部ドイツと北ドイツの領邦教会はそれによって最も強い打撃をうけた。

だが、教会指導部は内国伝道の活動を促進した。彼らは慈善活動への活気に充ちた協力をする牧師と教会を妨害した。彼らの限られた可能性の枠の中で、彼らはこの奉仕を要求し、また励ました。

領邦教会とその個々の教会のなかに、活発な辛抱づよい内国伝道が愛と犠牲をもってなす、多くの元気な仲間がいた。人の意見や国の同意を気にしないで、彼らは「彼らの福音主義教会の公式の奉仕の申し出」を実行した。すべての領邦教会の中で限りなく誠実に行われるようになった。

組織された「働き人」を認めるところだけで働いたり、重要な場面でだけ忙しく働くような印象を絶対に与えてはならない。多くのこと、また決めごとは、暗黙の中でなされた。働き人それ自身には、まったく内的生命や精神的発展というものではなかった。一つの見方と別の見方、その両方を総合して検討するするとき、はじめてわれわれは第一次大戦以前の教会について公正な判断を下すことが出来る。そこに停滞はなかった。やがて2つのプロイセン領邦教会を根から結びつけ、ヴィヘルンの遺産を受け継ぎ、おびえる人の魂のため

に闘いを新しく開始した、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクとアドルフ・シュテッカーという偉大な人物が前面に出てきた。

2

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク (1831-1910)

「最近のこの10世紀の教会史のなかでアッシジのフランシスとマルチン・ルターだけが十分にこの方法で、ボーデルシュヴィンクのように人の魂に触れていた」ことを確かめようと思うならば、そう多くを語る必要はない。彼の人格の力を逃れることのできる人はほんのわずかしかなかった。また彼はすでに存命中に一連の聖人伝となって知られていた。

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、彼の若き日の成長を、1857年9月6日に、ヴェストファーレン教会当局の最初の神学試験に志願した時に提出したラテン語の直筆経歴の中に、次のように書き記している。[28]「私、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは1831年3月1日、私の父エルンストが当時郡長をしていた北ヴェストファーレンにある小さな町テックレンブルクで生まれた」。彼の父は、後にプロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム4世の大臣となり、彼の母は信仰においては信仰覚醒運動の中に身をおいていた。フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは11歳から17歳まで「成績はそれほど悪くなく喜んで」ベルリンのヨアキムスターラー・ギムナジウムに通った。1848年の革命の年に、父はヴェストファーレンにある父方の大農場の生活に戻った。革命によって内的に厳しい損傷を受けたプロイセン国の混乱した状況は、公務員になるために、ベルリン大学で法学を学ぼうとしていたフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクを思いとどまらせた。彼は**農場経営の職**に身をささげる決心をした。2年間ずっと「私は大きな国有地で農業技術を学ぶ努力をした。その後私は首都に帰り、祖国の兵役義務に赴いた。だが兵役の3ヶ月のうちに、私はひどい肺病になった。身体的に非常に弱く、田舎暮らしに戻らなければならなかった。一方、私は以前からの父の希望で兵役義務を果たし、その後新たに大学で、とりわけ法学の勉強を始め、その後、その助けを借りて、自分の成功を考えずに、国に仕える事ができるだろうと思った」[29]

ボーデルシュヴィンクは農場主でボンメルンの州長官であるゼンフト・フォン・ピルザッハの父と親しくしていた-彼の非常に大きなボンメルンの農場**グラメンツ**の経営を引き継いだ。

ピルザッハは、分別を失うほどに熱狂して未開地を耕作して財産を増やしたりはしない、農民を気遣う、卓越した農場主であった。彼は可能な限り多くの小作地を彼の農場経営に直接組み入れるべきだと思った。「そのために、家族と十分な生活ができる独立した農民が、腹を空かせた労働者を見下すようになったことを、彼は見なかったし、見ようとしなかった。彼は見るができなかったのである。そのうえ、厳しい統合によってボンメルンにおける生活環境を安定させ、そうして革命を撃退できると信じた。彼の息子ボーデルシュヴィンクが熱愛した友人オットーは、父に対して不平を言ったが、彼はその時、政治的、社会的破局を予見していた」[30]しかし、彼は切々たる嘆きを甘受していた。

青年フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、天才的に有能な農場主の招聘を受けただけではない。彼は悲惨な境遇の中にいる人々に決定的な影響を及ぼした。監督官はくつろぎを邪魔されないように、外見上の厳格な外的秩序に安心していた。彼らは農民たちの実際の生活をよくしようとはしなかった。けれどもボーデルシュヴィンクは、この人たちがどんなに火酒を飲んで抑制の効かない中毒になり、粗野な楽しみがどんなに人生を破壊するかを見た。「力づくでかつ独断的に介入しなければ」ならない家族の生活環境を適切に世話しないで、私は何もし得なかった。「これが私の最初の心配でした」と彼は彼の父に報告した。そこで、私はほとんど毎日、ひどい窮乏のすべての地域にはいり、多くの家庭で文字通り家政を指導した。・・・私はグラメンツにいるすべての人々の運命を、監督官のボスから解放し、その300ターレル分のすべての責任を引き受けた。」

なにが彼の全生涯にわたってずっと際立っていたかといえ、それは23年間ずっと現れている、**貧しい人々に対する憐れみ深い献身、保護しようとする気高い準備、そしてまた所有の権利からの完全な自由、とりわけ組織し教育する偉大な教育の才能が際立っていた。**[31]

だがグラメンツにおいて、彼は真の召命に達した。中国人少年チシン(Tschin)の物語を読んで、これまで目標としてきた職業を根本的に変えられ

た。

神学研究をするようにとの神の聲がボーデルシュヴィンクに迫った。「そのとき、私が以前にもまして厳しく拒んできた神の手が私に触れた。私がしようとしている以上のもっと大きな外からの力と、私自身が他の人に劣らず罪を犯したり間違いをおかす者であることを恐れた。それは唯一の救い主に、私の避け所になってもらわなければならないほどに私を恐れさせた。同じ頃に、最愛の父を亡くし、心の出会いを増やしていった。」[32]

ボーデルシュヴィンクは、宣教館で、また大学で神学を学ぶために、また一度は宣教師として異教徒のもとに赴き、イエス・キリストの証人となるために、バーゼルに行った。彼は、聖書の中にあるキリスト教指針の深みを解き明かし熱中させる教師をカール・アウグスト・オーベリンの中に見出した。彼は神の国を、キリスト教の国として理解するように学んだのではなく、将来のイエス・キリストの出現を待ちわびるために、彼の証しをなして将来に仕えるための十字架と巡礼の共同体を結びつける兄弟会として学んだ。

彼はエアランゲン大学に一時滞在したが、ここでノイエンデッテルザウでの活動で知った偉大なルター派教会人**ヴィルヘルム・レーエ**に学んだ。バートボルにいた有名な父**ブルームハルト**訪問は、思いがけないことでおこった。彼はホーヘンシュタウフェン山の高地で激しい雷雨にあり、そこですっかりずぶぬれになって、立ち寄りざるを得なくなって訪問したのである。「敬愛する父ブルームハルトはその時、思わず彼のところに立ち寄った若き学生たちを、父親らしく受け入れた。私はすべての点で私の心を打ち明けることができる、彼にそのような信頼を持った。大いなる祝福によって生まれた、私たちの共同体の絆を、彼の最後の日まで結んだのであるが、そのような数日間を彼のところに滞在した。[33] **レーエとブルームハルトの、2人の出会いは、オーベリンの聖書神学との出会いと同じように決定的に重要な意味をボーデルシュヴィンクに与えた。**

よい成績で試験を終えたあと、ボーデルシュヴィンクはドイツ人ルター教会の**補助説教者**としてパリに派遣され、まる6年間滞在した。その結果、彼は第2の神学試験を免除された。青年牧師は、ヘッセンから移住しパリの道路清掃人をしている貧しい家族の面倒を見、元気づけるように教会を建て、学校を設立し、しつけと礼節のための教育

的な方策によって面倒を見た。彼は差し迫ったプロレタリア化をうまく防いだ。ボーデルシュヴィンクの特別な才能は、教育による影響、とりわけ子ども達との交流の中で、また病人牧会の中で証明された。

すでに、彼の名声は、彼がパリでの経験をドイツ教会の新聞に発表した報告によって知られていた。彼の敬虔の熱中はすでに明らかになっており、それと同時に、来るべき神の国の栄光を信じる信仰のために、罪の救いの道を宣べ伝えた。彼にとって教会は、来るべき主に向かって遍歴する、その群れであった。

ボーデルシュヴィンクは、1861年4月18日、彼のいとこのイダ・フォン・ボーデルシュヴィンクと、**パリで結婚した**。彼の若い妻は病弱な体質であったため、結局、ヴェストファーレンの共同体、ウンナ近郊の**デルヴィヒ**での第2の牧会を引き受けることになった。このヴェストファーレンの農村においても同様に、彼の教育的・信仰覚醒的才能は発揮された。彼はここで村落共同体に伝わる紀元前からの伝承を大きく変えた。たとえば、射撃祭を宣教祭に変えてしまうことなどである。彼の包み込むやり方は、彼らに、いったん軽薄野郎といわせるようなものであった。「人は一度だけ生きる」は「人は一度だけ生きる。そして人は一度だけ死ぬ」というように説教した。

それと並んで彼があきらめねばならなかったパリ市民の就職先がないという特別な不安があった。ボーデルシュヴィンクは驚くべき頑強さをもって1905年まで、1870年～1871年のドイツ-フランス戦争の間だけでなく一最終的にはその存続が守られた一脅かされた就職口が存続するように尽力した。[34]

デルヴィヒで、彼は、政治的な、また他にも時代の出来事を定期的に論評した、保守的なキリスト教日曜新聞の、「**ヴェストファーレンの家族ぐるみの友人**」の出版を引き受けた。1865年から彼はこの新聞を指導した。そこで人は真の召命へと次第に成長していく、神学者ボーデルシュヴィンクを論文で知ることが出来た。

1866年1月に、デルヴィヒで、彼の4人の子どもたち、3人の息子と1人の娘を百日咳の流行病で亡くした。「私たちの4人の子ども達が死んだとき、私はまず、神が人間に対しどんなに冷酷であるのか、そしてまた、このことから、私はほかの人に対して憐れみ深くなっていることに気づいた」。彼の4人の子どもたちの死の報告を読む

者は、彼を2度と忘れることはなかった。[35]「彼は子どもの病人用ベットで、永遠の門の前では、若い時の、また老いた時の姿は消えてなくなることを知った。彼は、子どもたちの墓で、聖なる憐れみ深い神が、私たち人間が恵みに導く審きを信じるようにキリストの十字架を起こし、キリストの十字架以来、あらゆるところで神が愛したもう世界に帰る道が用意されているということを知った。」[36]

ボーデルシュヴィンクは40歳でヴェストファーレンの農村から**ビーレフェルトに招かれた**。そこで、彼はディアコニッセの施設をつくる前の5年間の指導を引き受けた。それと同時に彼はシュパレンブルクのはずれにある農場に一時的に寝泊りしていたてんかん性の子どもの面倒をみなければならなかった。ささやかな始まりから、**キリスト教会の中に、奉仕を通して慈善を生み出すもつとも独創的な事業**を行う憐れみの町が成長した。それは、彼が、クリスコナの指導、インドのゴスナーミッションの指導、故郷の事業の指導、そしてベルリン中央ディアコニー施設ベタニアの指導の申し出を受けて断ったあと、彼をとらえた第5番目の招聘であった。

1867年以来続いている「てんかん病者のための救済施設と看護施設」と1869年に作られたディアコニー母の家サレプタの、2つの事業をボーデルシュヴィンクは兼務で指導した。それに数年のちに兄弟の施設ナザレが発足した。それによってすべては内的統一性をもつようになった。

てんかん病の人たちになす彼の活動は先駆的なものとなった。てんかん病はほかの病気と一列に並べることはできないことを彼はすぐに知った。てんかん性の人たちは発作から開放されている「元気な場合」は、健康な人たちと同じであり、それどころか彼らにあらわれた才能は、しばしば健康な人たちよりも優れていた。彼は「傷つけられた」ものであるという意識をまず受け止め、そして彼らに故郷と労働と自尊心を与えた。彼は「作業療法」の発見者となった。ベートルでは、もつとも弱い人もそれぞれ一緒に働くというしっかりしたきまりが大切にされた。創意工夫に富んだ愛は最も貧しい人々にも、意味のある仕事を仲介し、彼らに粘り強さと整理によって、自尊心を回復し、共に作り出された全体の枝とした。彼はヴィヘルンとベスタロッツから家族思想を、また古い救護事業から祝祭を受け継いだ。祭りの祝典は、創意に満ちた豊かさの中に、すべてが互いに結び合っ

て活動するベートルという合言葉となった。

けれども、ベートルの中心に、ノイエンドッテルザウのレーエの場合のように、才能のある患者たちすべての協力のもとに建てられた礼拝堂、**シオン教会**が建設された。礼拝順序はレーエの影響をうけた。ここでは発作に見舞われた人の叫び声の中でも同じように「私はあなたの深い憐れみを隠れ場としており、主イエス・キリストの恵を求めます」という告白と慰めが鳴り響いた。[37] 詩篇 126 編はベートルの詩篇となった。

「主は偉大なことをわたしたちになさった! 主がシオンのとらわれ人を解放される時、彼らは夢見る人ようになる。その時、私たちの口は笑い声に満ち、舌はほめ歌が満ちるであろう。人は異邦人の下で言う。わたしたちは喜び祝います。あなたは小川の水を早春の大地に戻すように、わたしたち捕らわれ人を連れ戻してください。『涙と共に種まく人は、喜びをもって刈り入れる。彼らは出て行き、そして泣きながら尊い種を運び、喜びをもって、その束を運んでくる』」。

さて、てんかんのわずかな人たちだけが治って、退院できた。だが多くの人はこちらで自由に生きることをはじめる共同体にとどまった。健康な共同体も、彼らと共に同じ「救い主」を待ち望んだ。**神学を終末論的に伝える**ばあい、すべての難問に基本的な信念を持って、告白をもって、きたるべき主が、健康な人も病人も含めて、目に見える、そして目に見えない、全ての牢獄を打ち砕き、ベートルがドイツ内国伝道の内部で生まれつつあることを実現できると、思い切って答えようとした。

ボーデルシュヴィンクは、それが最もよい奉仕であることを証明し、彼が出すように指示した**国王に請願する方法**を知っていた。彼はおさえがたい陽気さをもって生き活きと願うことができた。たとえば1891年、施設に豊かな地下水脈を使用できるように、農場エノンを手に入れた。毎日5万リッターの水を得ることができた。それは5万マルクの購買価格になった。そこでボーデルシュヴィンクは「これから毎日、私たちの貧しい病人に1リットルの新鮮な水を提供するために」1マルクを贈るようにはどうかと、すべての読者に呼びかけた。この金額は短時間で楽に集められた。けれども、**アメリカの百万長者カーネギー**が彼に多額の金を贈ろうとした時、彼は驚いて拒絶した。彼を助けることができない百万長者は、贈り物を寄付するというだけでなく、彼の事業のために祈る単純な人でしかなかった。[38]

神の前での明るさとのんきさと、主の日が来るまへの合図をなしている愛の奉仕をする喜びが、彼の神学からうまれた。このことはドイツの慈善活動の中にあたらしい響きをなした。

ボーデルシュヴィンクがベートルを引き継いだ10年後、仕事の限界を超えて、**国民の大きな社会問題**を引き受けた時、彼の多くの友は驚いた。1871年の楽な勝利とフランス戦争の犠牲の数10億の宝の後に、大きな経済戦争がドイツで続いて起こった。1880年ごろ、**およそ20万人のパンを求める工場労働者たちと国中の職人たちが古い街道を移動していた。**突然起こった非常事態に、これまで開設した91の施設「故郷の宿泊所」は足りなかった。毎日20～30人の物乞いが施設の門をたたいた。ボーデルシュヴィンクは1時間の作業をした人に、昼食を提供するというようにした。その同じ日になお2～3人の「街道の愛する兄弟たち」があらわれた。

だが、その時ボーデルシュヴィンクはさらに先に進んだ。助けを求めるある人が、ずっとここにいさせてくださいと願った。「もし、あなたがてんかん病の人であるならば、わたしはあなたをとどめることもできるのに」。「私もてんかんです」。ボーデルシュヴィンクに思ってもいなかった答えが返ってきた。街道にでてくる20万人の失業した工場労働者たちの困窮は、「これは、すべての人が共同の責任をもっている**資本主義と社会のてんかん病**ではないか? 彼はフランクフルトの牧師グスタフ・シュロッサーから、ヴェルテンベルグの手本にならって、この蹟きの石を引き受け、共済年金協会と農業コロニーを創設した。彼はおどろくべき粘り強さをもって、**放浪する貧困者のための労働者コロニー**の設立を進めた。まず最初に1891年、彼はコロニーをビーレフェルトとパーダーボルンの間の**ゼンネ**に建設した。ここでお金のない200人の放浪者に、3～4ヶ月「施し物を受ける代わりに労働」としてハイデボーデンの開墾をする仕事を与えた。1898年、ボーデルシュヴィンクは、泥炭を掘り出す泥地であったダウンメルゼーのヴィーテングスモールの広大な用地に、緊急の大きな居住地を建設した。ボーデルシュヴィンクは家を失った人のいろいろな救護所の困窮をよく知っている-ベルリンのために、首都の北方に、そこに収容された人たちは個室をもらえる-**ホフマンシュタール・コロニー**をつくった。[39]

ベルリンドイツ労働者コロニー中央協会は、ボ

ーデルシュヴィンクの肝いりで1884年2月12日に建てられていた。その中に、彼の忠告を受けて労働の推進者となり、これまで続いてきたコロニー協会が統合された。プロテスタントとカトリックの協会は調整して一緒になった。ゼンネにあるヴィルヘルムドルフの労働者コロニーの開始以来1891年まで、20の福音主義と2つのカトリックのコロニーが設立された。[40]

これらのコロニーは、後に皇帝となったフリードリヒの皇太子銀婚式から出た補助金がなかったとしても、「自由な教会の慈善活動の事柄」ととまるべきであった。職を失った工場労働者たちが歩く主な街道でなされた、国の給食ステーションの緊急なネットワークをつくることは、まず第一にボーデルシュヴィンクの信念によると国当局と地方自治体がなすべき要件であった。ここで道徳に反する物乞いを禁止するために、宿泊所と給食はある程度の仕事をした人に対してだけ与えられた。ボーデルシュヴィンクはどのステーションでも「慈悲深い木造の部屋」を望んだ。シュタインクロッペンには彼にとっては緊急打開策としてのみ大切だった。

模範的な規定が、行政区域ミンデン全体の中で、ボーデルシュヴィンクとの関係で実施された(1883)。ここでステーション間ネットは、放浪する貧困者がステーションからステーションへ物乞いせずに行けるほど、非常に緊密であった。成果は納得できるものであった。「放浪」はここではほとんど完全になくなった。この模範にしたがってボーデルシュヴィンクは国の全域を組織しようとした。

ボーデルシュヴィンクは同時に「故郷の宿泊所」の緊密なネットを望んだ。ビーレフェルト・ギムナジウムの教師オットー・ベルテス-ボンの最初の宿泊所創立者の息子ー彼は、1年間、委員会の指示で、手工業者に身を変えて、宿泊所のありかたを考えるために、宿泊所とステーションを巡回し、独自の考えをもつようになった。

ボーデルシュヴィンクは1884年プレスラウまでの旅行を計画した。ボーデルシュヴィンクは報告から社会革命が接近しているという確信を得た。そしてそのことについて個人的に良く知っている皇太子に、同年10月の終わりに次のような手紙を書いた。

「社会民主主義のアジテーションはー(ブルジョワ階級が)有力な手段を手にし、その中で実際に権利を主張してきた安全な地位に反対して、ほか

の方法で権力からの解放を闘えるようになるよりも、また彼らが権力を得ている現実の不正よりも、一ブジョワ階級の利己主義を取り除いてしまった」。[41]

しかし、今度はボーデルシュヴィンクは、1886年2月18日にベルリンで決議された「**ドイツ宿泊所協会**」の設立へと向かった。オルデンベルク牧師は内国伝道中央委員会の書記長としてこの案件を引き受けることをはっきりと拒んだ。結局、中央委員会は、宿泊所がお金をもたない手工業者に感情を傷つけられることがないように、彼らを避けることがないように、支払いをする移動職人にだけ宿泊所を開くという、古いベルテッセンの線を完全に固守しようとした。

だが、ボーデルシュヴィンクはこの状況についてもっと知っていた。常習となった物乞いはすでに「故郷の宿泊所」を訪れていた。どの宿泊所所長が、この状況の中で、誰が宿泊物乞いで得たペニヒで支払った宿泊客なのか、誰が、まじめに働いたお金で勘定を支払った宿泊客であるか、見分けることが出来ただろうか？ 1884年から1890年までの7年間に198の新しい宿泊所が生まれた。1893年まで、その数は426にのぼった。2,3の地方教会、もしくは領邦教会は、この活動のための募金を許可したが、たとえば他のハンザ同盟の町、カッセル、フランクフルト・アム・マイン、メクレンブルクとリッペ-デットモルの両者、ヴァルデック、ヘッセン-ダルムシュット、アンハルト、テューリンゲンの国々と南ドイツは拒絶した。

ついにボーデルシュヴィンクは**積極的な政治の道**へと進み、1903年9月末にキリスト者一保守党の候補者として立候補した。放浪する貧困者のための援護が彼を駆り立てた。失業をなくするための法的規制の問題は、もはや彼を休ませなくなった。ボーデルシュヴィンクはプロイセン州議会で活動を始めた。彼はフォン・ヴィルヘルム2世に非常に失望させられるようになった。

「私がどのようにしてそれを国王陛下に正直にまた誠実に願って、台無しにされたかを、あなたが知るならば、私の武器が彼に対して無関心になっていることを、あなたがたは納得するでしょう。私は貧しい祖国のドイツのために、祈りの手をもってのみ統治をし、暗い道を通して光へと、その人を助け起こすことができる」。[42]

ボーデルシュヴィンクは、今までに心ひそかにしてきたように、領主に最後の決断を譲るのでは

なく、そうするのでなく立憲君主制で洗練された議事に譲った。1904年と1909年の間、ボーデルシュヴィンクはプロイセン議会で働いた。1904年5月5日、ボーデルシュヴィンクは領邦議会で第2の演説をした。彼は注目を引くようになった。

「演壇のまわりにはびっしりと群がり、施設のメンバーが立ち、そして演説者の言うことに文字通り耳を傾けた。ひとことももらさないように聞き入った沈黙は、衝撃を与える機知に富んだ語り口がよび起こした爆笑によって、中断された。彼が終わりに「アーメン」と言ったとき、聴衆に伝わった感謝に満ちた聴衆の拍手はなりやまなかった。しかし、尊敬すべき老人は演壇に登ったように、そこを去り、すべての祝辞を、大臣からさえも逃がれた。」[43] ボーデルシュヴィンクは「運河建設案」の際に、労働者の最下層の人たちに、憐れみ深い社会的責任をもった取り扱いをするように勧告した。運河建設案に対する彼の賛成は殆ど背後に後退した。公共の新聞ではボーデルシュヴィンクの演説の反響は大きく、後まで続いた。

ボーデルシュヴィンクは共通のプログラムを持って来たのではなく、まったく具体的な願いを持って来たので、国会議員と政府の代表者に強い影響を与えた。それゆえに彼は、ベートルで健康な人と病気の人を同じように扱っているように、彼らを違ったものとしては扱わなかった。

国会や省では、かたくるしい「あなた・あなたがた」(Sie) がふさわしい呼び名とされているが、それはここでは「きみ」や「きみたち」(DuとSie)であった。ベルリン省庁の守衛たちは「父のようなボーデルシュヴィンク」をよく知り、愛した。そして彼のどんな障害も取りのぞいてくれた。1907年ボーデルシュヴィンクはプロイセンを放浪する貧者のための救済法と規定を成立させた。だが、新しい緊急の問題と困窮がもちあがり、その結果この法律は意味を持たなくなった。[44]

そうこうするうちに、もう一つの社会的困窮地域がボーデルシュヴィンクの関心をとらえた。工業都市のなかで不健康な長屋にひしめきあって暮らしている労働者階級の住宅難は問題であった。中央委員会がキリスト教家庭生活のために始め、そしてひどい住宅難にしたすべての欺瞞的なことは、何の助けになったのだろうか？ 「自分自身の土地に住む人たちの承認はもっとも有効な手段であり、私たちの労働者階級を援助し、また健康な家庭生活を励まし、保持し、社会生活の領域で重要な課題はなくなった」

1885年、彼は「労働者の家」の会をつくった。その1人は個人用住宅のために預金をすると約束した。町の工場で働く住民だけでなく、大農場で働く労働者も同じように「一区画の相続分」をもらえる。

1888年の内国伝道中央委員会カッセル会議で、ボーデルシュヴィンクは発展をつづける工業都市ビーレフェルトの門の前に、協会によって建てられる「労働者の家」42の2戸建住宅に、83人の労働者と手工業者の家族を住ませると言った。彼の影響をうけて、どの大都市にも中央委員会がそのような協会をつくった。

またここで、当時、ふたたび好調になってきたドイツの経済と財政状態を考えると、ボーデルシュヴィンクの遠大な計画は十分に実行可能となっていたのである。だが中央委員会は「住宅難解消について」4頁に印刷した小さなパンフレットで満足し、その際、内国伝道協会によい助言を与えたが、「建築組合として、労働者住宅等の建築を引き受けること」をしなかった。[45] そのようにして、中央委員会は、ボーデルシュヴィンクがつよく迫った課題を再び回避した。

ボーデルシュヴィンクは落胆しなかった。彼はこの考えに賛成する事業家をさがした。エッセンでのクルップとの長い協議をしたあと、この要望は適切であるということが納得された。クルップは近いうちに労働者が所有権を持ち、工場に拘束されない600の家を建てると約束をした。またボーデルシュヴィンクは市の行政にも尽くした。彼の要望を理解したのはブレーメンとエルベフェルトの当局だけであった。ボーデルシュヴィンクは、同様に、**国庫からの住宅建築計画のための融資**を要求した。彼は1892年個人的にヴィルヘルム2世に手紙を書いた。ボーデルシュヴィンクの旅行の秘書は、訪問旅行と講演によって、ドイツのあちこちの「労働者の家」協会のことを語った。成果はささやかであった。健全な中産階級の所有関係のなかで、労働者階級が変り、その社会的隔たりを埋めるのは、ずっと先のことであり、そこでボーデルシュヴィンクは非常に急いでいた。彼はあきらめずに語り、「時間が少ししかない」ことを気にしていた。19世紀は、**ひそかな不安が彼らを駆り立て、社会的緊張のゆえに「恐ろしく、ぞっとするような結果になるだろう」**。[46]

なお、他に3つの制度の中で、ボーデルシュヴィンクは、ベートルで根づいた活動を拡大し始めた。植民地熱の兆しの中でつくられ、まともな発

展をしなかった「ドイツ-東アフリカ福音主義宣教師組合」は、1906年、ボーデルシュヴィンクによって、「ベートルミッション」として引き継がれた。アフリカに関しても同じようにボーデルシュヴィンクは、伝道活動の時間は短く、それは有効に活用されねばならないと確信していた。「宣教活動はどんなときにも主の将来を待っている」とくり返して語った。

それに、将来の牧師のための候補者寮の設立が加わった(1890)。ここで、半日は青い前掛けをしてベートルの患者に奉仕し、一方で説教者のセミナーのプログラムのために他の時間を使うようになった。

1904年、ボーデルシュヴィンクが施設の真ん中につくった**神学校**は奇抜なものであった。おどろいたことにプロイセン政府はすみやかに許可をした。当時大学で有勢であった自由主義に対して釣り合いがとれたものをたてるべきであった、この自由学部の講義は、2人の講師と11人の学生で始まった。学生を入学させる時は、教会的オリエンテーションをし、信仰告白をともなった神学が準備された。この大学は始まった年に特色を発揮した。

1910年4月2日、ボーデルシュヴィンクはベートルで亡くなった。彼は亡くなる少し前に、ベルリンの無宿者救護所を通して「犯罪と飲酒癖と悪弊の温床」を歩きまわり、そして「まだ希望を失っていない人たちをさがして、ここに集めた」。彼は彼らのために労働者コロニー「希望の谷」をベルリンの門の前につくった。元気が衰えた晩年に、彼はしばしば大声でいった。「進め年老いた怠け者」と。[47] 彼は臨終の床で最後の言葉を語った。「心配するな、子どもたち、私たちの心配すべてを彼に委ねるのだ！」。

マルティン・ラーデは「キリスト教世界」の中で、ボーデルシュヴィンクの意味について説得力ある面影を描いた。

「ボーデルシュヴィンクは4月2日、ベートルで眠りについた。人もうらやむ豊かな生涯は終わりを迎えた。なすべき莫大な善行と、その全てに対してなされた感謝を、この人は受けた。彼はドイツでもっとも愛され、最も尊敬された人である。こういわれた時があった。党派や宗派の境界を超えて、いまは彼について、多くのよい言葉が語られ、書き記されるようになった。私たちのなかに、彼から感銘を受けず、とりこにならず、影響を与えられなかった、そのような人がいるだろうか？。

忘れられない出あいがある……。神はこの人の思い出という彼が残した大きな遺産を与えてくださった。何千もの人が心からそして良心から、彼の面影に最後の影響を受けたように、もっとも個性的な仕事を残した！」[48]

3

アドルフ・シュテッカーと 反教会的ベルリンをめぐる闘い

1878年と1909年の間の時代に、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクと並んで、もう一人の宮廷説教師であり、護民官である**アドルフ・シュテッカー**ほど福音主義教会の中で知られた人物はいない。2人は親しく協力した。「1人はもう1人について、友のライフワークが国民の将来の問題を決定していることを知った」。

たとえ二人が互いに歩調をあわせることができなくても、ボーデルシュヴィンクはベルリンの宮廷説教師に変わらぬ友情をもっていた。2人は本質的に違っていた。ヴェストファーレンの貴族には、すべて人の政治活動への欲求と、政治的な議論をする情熱が欠けていた。新しい慈善活動のための資金を必要とした時、あるいは運命に打ちめされたあらゆる階層の数え切れない人が助けを求めた時、ボーデルシュヴィンクはベルリンの宮廷社会に、また指導的な人たちに、彼の親戚関係とそれ以外に時間を費やすだけであった。」[49]

アドルフ・シュテッカーはまったく違っていた。「彼の基本的動機の誠実さは間違いなかった」。それ故、ボーデルシュヴィンクはそばで彼を助ける人であった。だが彼の闘いは全く別の分野にあった。ボーデルシュヴィンクの前では、断固として敵であった者がいつのまにか彼に深い尊敬をもっていた。彼の人格の力から逃れうる人は誰もいなかった。それをあえて汚す者は誰もいなかった。宮廷説教師は、無数の人たちから愛され賞賛され、数千の人たちから激しく拒絶された。最も独創的なドイツ人福音伝道者サムエル・ケラーは、シュテッカーについて次のように語ったことがある。「私はまさに彼のようにドイツじゅうを何度も通った。北から南、東から西へと旅をした。鉄道の中で、だれかれとなく話す会話で話題になる人はシュテッカーのほかになかった。そこで、わたしが言葉をふと口にする時には、わたしは荒れ狂った憎悪の中でも、別のもっとも大きな感動の中でも、彼についてもっとも美しい会話をしてい

た」・・・彼の名はすべての大衆新聞で、不平家たちとシュテッケライ！というように、いつも互いに違った言葉が同時に載っていた。」[50]

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクのライフワークがそうであったように、アドルフ・シュテッカーの活動は、**ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンの働きの継承**と考えられる。アドルフ・シュテッカーのばあい、生涯をきめきりかけとは、首都のために、また異邦の町ベルリンのために、闘うことであった。

この道は、アドルフ・シュテッカーの子ども時代には予想されないものであった。彼は1835年12月11日、職人組合の親方の子として、ハルベルシュタットのキュラジーレンの近くで生まれた。

彼は4人兄弟のなかでただひとりたびぬけた才能を発揮した。6才でギムナジウムの1年に入学できる知識をもっていた。その数年後、小学校から直接ギムナジウムの第3学年になった。彼は正直で思いやりのある父を心から尊敬していた。意思の強い想像力豊かな母はギムナジウム参観をみとめさせた。

天分豊かなギムナジウムの生徒は信仰覚醒運動家である情熱的な大聖堂説教師、ユラ (Jura) が学び、伝道師となり、そして親しい青年たちと聖書を学び、福音宣教の奉仕のために召されているという確信を持った、—そのようなマルチン・ヒューゴ・ランゲの説教を聞き、従ってくるようにとの人格的な**神の召命**を感じとった。

アドルフ・シュテッカーは、大聖堂説教師の家に、また枢密法律顧問官クリューガーの家に集まる信仰覚醒運動の人たちが、信仰の確信をもっていることを知った。

「いろいろな生徒や若者の過ちは、有害な交際や誘惑によって、宗教的洞察やぬくもりの欠如となり、その結果、畏敬の念を持って仰ぐことのない私の生活は、上にあるものを真に崇めることのないままであった。私はよい生徒になったが、悪いキリスト教徒になった。私は長い間愛されてきて、良心が私を責めることなく暮らしていた学校の最後の年、1853年の夏に、ついに神は私を心にとめ、私に光をもたらしした！」。

ここで、クリューガーハウスの信仰覚醒的、敬虔主義的な気分させる交わりの中で、青年の信仰は強固なものとなった。

「そう、そのころ私はキリスト教の生活の力の中に深く導かれ、そこから再び信仰の重大な迷い

や否認におちいることは一度もなかった。」[51]

アドルフ・シュテッカーは深刻な疑念をもたないままであった。だが、彼には多くの内的な道徳的闘いがあった。

「私はなんども絶望のふちに立って、好んで深い虚無に落ちていくような思いと意志をもったことがある。だが私は深いところから、私のキリストの恵み深い顔が私を照らして輝かせた—この深みの中で私はすべての虚栄心とすべての功名心とすべての悪い欲、自己正当化するすべてを沈めて、この深みの中で、闇のただ中に、私の神の恵みを見た。なお、しばしば古い人がつつい姿をあらわすことがあるが、それは力なく、ほとんど一瞬でも目をさますことができない幻である。いと高き方の守りは居心地がよいものである。・・・私の本性は根本悪の荒海、流れに追われ、怪物の深みに入っていく。だが、本当に導いてくれる者のいない闘いの中で、主はいつも私を助けてくださった。・・・そして、いま、喜びに満ちた愛の中に成長する、勝者に与えられる厳しい務めが多くあり、それは大きな闘いの賞であったということ、私はまったく知らなかった。・・・キリストの死の痛みのなかで、私の生がはじまるということがわかる前は、わたしは長い間格闘していた。・・・しかし信仰のすべての星が深い夜に私を沈める時に、ゴルゴタの真っ赤な恵の太陽が昇った。その時、私は自分の魂に平和がないことを知り、そこで私の心は私の主を熱心にあがめて静まるようになった。」[52]

この人の胸は、闘いによって非常に激しく非常に情熱的に、ゆさぶられるようになった。そして外的生活は非常に心を揺り動かされた状態になった。彼の**神学研究**は、ハレで、後にベルリンで、スパルタ式の儉約によってのみ可能となった。

「私の外的状況はとても乏しいものであったが、私はなんとかやってきた。私は美しい家の門で、もちろん屋根の下に密集している、ひと月たった3ターレルの大きな住居をみつけた。家の下には昼食ができる地下室があった。そのうえ私たちは困窮をまったく障害とは考えず、ただたんに自分と世界にうち勝つための試練と思っていた。また一度は、私たち同室者は6週間のあいだずっと地下室で昼食のパンだけを食べたことがある。早朝はしばらく井戸に行き、夕方は美しい家の並木道を散歩した。苦情を訴えるものはなにもなく、私たちは四旬節の断食の時にもかかわらず勤勉な学生でありえたことを喜んだ。

シュテッカーはベルリンで最初の神学試験を受け、マグデブルグで合格した第2の試験のあとに、ランプスドルフ伯爵の家庭教師としてクアランドに行った。1870/71年の独仏戦争の後、シュテッカーはドイツが征服して新しく手に入れた**メッツの地区牧師職**に応募しその職についた。シュテッカーは兵士のためだけでなく、移住してきたドイツ人プロテスタント信者の困窮のためにも努力した。彼は病人のためのディアコニー・ステーションと、そして福音主義の高等女学校をつくり、そこで彼自身授業をした。教会建築が軌道に乗ってきた。そのようにシュテッカーはベルリンに招かれる以前からすでに内国伝道の仕事の分野で中心的人物であった。

1874年10月18日、彼はベルリンで空席になっていた第4番目の宮廷説教師と大聖堂説教師の地位についた。当時、福音主義ベルリンが悲運に見舞われた時代であった。1874年10月1日**婚姻法**が発効した。従来の洗礼と婚礼の義務はすべて記憶から失われた。それは事実上、従来の国教会というものの終わりを意味した。

「新年にびっくするような統計上の証拠を示して、私たちの目の前で起きたこと、また同等に取り扱ったなにかを期待する人は誰もいなかったし、またひどい悲観主義者もいなかった。ここベルリンで戸籍上の婚姻を結んだ結婚は、100のうち18から19だけが教会で祝福を受けた。100のうち52名だけが洗礼をうけていた。」

これがシュテッカーのベルリンでの出発であった。ベルリンの人たちの間では、教会への嘲笑とキリスト教信仰へのあざけりが、ベルリン大衆の手本となっていた。正式の「**民事婚の流行**」(Zivilstandsrausch)が野放図に広まった。指導的階級の若いカップルたちは、教会を軽蔑していることをはっきりしめすために、あとで教会の祝福をうけることはしないで、戸籍課で華やかに結婚の約束を行った。教養ある人たちの間では、教会に属さないことがよい手本とされた。

ベルリンでは、すでに何千もの洗礼を受けていない人がいることがわかると、進歩新聞は「万歳！ベルリンの非キリスト教徒の最初の千人」と宣言した。ある有名な進歩的な新聞が「生きるのは楽しい、今日では、教会の影響を受けずに、人は生きたり死んだりできる」などと間違いを語り、趣味の悪い言動を始めた」[53] 社会民主新聞は、日刊紙でラディカルで市民的な自由主義論評だけ続け、労働者たちの列の中で教会とキリスト教

の衰退を心配した。

そのような**首都における離反**がおりえたということは、ついに難しい問題となった。「たしかにフランス革命では、困ったことがあったが、キリスト教が存在する限り、教会体制への軽蔑はその当時のベルリンのように、非常に多数の、非常に屈辱的に、非常に圧倒的に、突出することは決してなかった」。1870/71年にフランスに進軍したドイツ軍はなんと宗教的に高揚した気分を満たされていたことだろう。青年アルフレートは当時ライプツィヒにいる父に宛てて感極まった感動を次のように書いた。「キリスト教があるかぎり、セダンの日のような、そのようなドイツのテ・デウムはまだ一度も歌われることはないでしょう」。

シュテッカー自身ある日のことについて次のよう報告している。

「その時宗教的・道徳的な目で私たちの民を観察した人たちがもった同じ意見は、1870年に、特に戦争の最初の一月のあいだ、私たちの民はおそらくなかったような敬神の念にみだされていた。」[54]

プロテスタント・カトリックそしてユダヤ教徒のための軍隊牧会は、戦争の間輝かしく組織されてきた。野戦病院には150人以上の聖職者が準備された。そのためなお360の戦場ディアコニーに対して、また看病のために養成された神学の志願者が数えられた。トロイ、オルレアン、アミアン、シャルトルにある大聖堂は、祈る兵士たちに満ち、そこに多くのプロテスタント信者がいた。

ソルフェリーノの戦場を訪ねたあと(1861)、スイス人博愛主義者アンリ・デュナン(1828-1910)によってすすめられた、**赤十字ジュネーヴ会議**は、神の祝福をはっきりと感じられた。そして、ドイツ-オランダ戦争の後1864年8月22日に設立された。この旗のもとで負傷者であるならば戦闘外では、敵味方の区別はなかった。「硝煙と炎の中で、医師と看護師が平和活動をする間に赤十字の旗が舞っているのをみた人は、戦争の只中で進められているキリスト教のなにかの力を感じ、また神の国が再び来るべき力を感じた」。その頃はそう感じたのである。戦争のその年にドイツの指導者たち、ヴィルヘルムⅠ世、ローン、モルトケ、ビスマルクの宗教的な行動は意味深いものだった。[55]

そしていまやこの**帝国の首都にある教会の没落！**以前にあった宗教的情熱は、すべて吹き飛ばされたかのように思われた。三つの理由が深い意

味をもなく指摘された。会社乱立時代(1871-73)の10億人と文化闘争、そして社会民主主義の革命宣伝である。

それに対して、わずかな仕事しかない宮廷説教師シュテッカーは、良心の呵責を感じた。彼は**個人牧会を始めた**。彼は毎日5人か6人の学生たちを戸別訪問した。その当時社会民主主義の新聞は冷静に次のように言っている。「これは、怠ってきた牧会のためにベルリンの人たちが発行した領収書である」。

シュテッカーは、子どもを正しい名前で呼ぶようにした。教会が国と領主を束縛することは、教会離脱に致命的な役割を果たした。「**王冠と祭壇**」の結合は、多くの社会民主主義者たちが離れるのを思いとどまり、キリスト教の明確な福音理解を広めると思われた。聖職者たちは、下層階級の人たちに宗教をもたせ、また従順でいいなりにさせる「**黒い警察**」と思われるだけであった。

シュテッカーは、**自由な国民教会の中で国教会が変貌する**のは避けられないと思った。ここに戻さなければならぬ遅れがあった。領主は民の生活の中で絶対的な力を失った。彼らの権利は議会によって制限された。だが、教会の領域の中で、王位は最高監督(summus episcopus)の意味で、指導者としてのこれまでのある種の影響を持っていると主張した。おそらく、これは領主がこれまで教会の中で直接行使し、領主の他の権限を国民議会に移したある種の権限もあった。これはすべてをよいものにしたのではなく、ひどいものにしただけであった。というのは、いまや国会議員たちは、プロテスタントかカトリックかあるいは無神論者であるかを、教会の中で自分で決めて言い表していたのである。

プロイセンでは、ドイツで一番大きな福音主義領邦教会が、教会総会の中で、1873年の憲法による立法権をもっていた。だがこの教会総会は国の省に依存したままで、責任ある大臣をおそれなかった。プロイセンの教会総会はかつて実際に一度解散させられたことがある。教会省のメンバーは、教区監督も同じく、王に好まれた人が直接任命された。国はそのように一緒にすることが出来、また、自由なカトリック教会があえてしなかったことを、都市の機関は自由のない福音主義教会と一緒に遠慮せずにやってみることが出来た。

シュテッカーは、まず国に縛られている教会を解放する闘いだけに身をおいた。彼は大胆にもプロイセンの王に、領邦教会の最高監督としての

これまでの権利はないとみなし、そして彼は王に後援者として限定的な発言をするように求めた。

国から自由な国民教会を求める呼びかけは、教会にベルリン市民を取り戻すためのシュテッカーの闘いの一部だった。

「ことによると、教会は後になって問題に殆ど口出しをさせないか、まったく口出ししないようにもくろんだのかもしれない。国に対する関係は、原則的には束縛であり、それぞれの教区監督の任命にいたるまで、教理問答から讚美歌集、教会生活の証まで、大臣のコントロールの下にあり、また奉仕者の教育はほとんど完全に国の手中に納められることをもくろんでいたのだ」。[56]

シュテッカーのこの願いは、当時の若き世代の神学生だけに理解されていた。年配の人たちは増え続ける教会離脱を考えると、自由な国民教会の中にいるよりも自分は国の保護の下に守られているほうがよいと思われたのである。

1877年、シュテッカーがベルリンに入ってから4年後、初め兼任であった**ベルリン都市伝道**を引き継いだ。ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは、すでに1858年、プロッツェンゼーのベルリンの門の前に、「福音主義ヨハネシュティフト」を第2の兄弟(指導者養成)施設として作り、救済施設をもつラウエスハウスの隣に、また刑務所看守の養成学校をつくった。ここで都市伝道事業のディアコニーも同様に養成されるようになった。だが、この事業はまっすぐには進展しなかった。それと並んで、職務上の指導が妨げになるだけだということを見分けた教区総監督のブルックナーの指導の下で、第2の小さな都市伝道がはじまった。

D.ブルックナーは1877年、都市伝道の指導をやめて、それを私の手に移した、そこで私はいつも同じ協力関係を活発にし、そのために有能な牧師に助言と助力をもって全面的に協力する青年たちを勇気づけた。私は都市伝道が新しいボランティアの形でなしうる大きな発展を予感した。

その時、別の場所に都市伝道への要求があった。ヨハネシュティフトやヴィヘルンの古い財団は、都市伝道を始めるために1877年に1人の牧師と5人の都市伝道者が活動を始めた同じ方法で維持されていた。私はこの二つを初期段階で合わせることに成功した。その時故フォン・ベトマン-ホルヴェク大臣が助けた。内国伝道中央委員会は統合を進めた。この事は私の指導のもとでなされ、それは私の人生の30年間ずっと大変な苦勞であ

ったが、また同様に最も大きな喜びともなった。
[57]

ここから**反キリスト教のベルリンへの真の攻撃**が始まった。家庭訪問はすべての都市伝道の基礎となった。子どもたちは子ども礼拝に招かれた。そのためにホールが借りられた。その中に聖書を学ぶ人が集まった。盛んになっていく文書伝道、ホールと礼拝堂で増え続ける聖書研究グループと都市伝道会の数は、カリタス事業とならんで、主な事業分野であった。貧民救済、釈放囚人の援護、子どもの学校、裁縫教室、「フライアーアーベント」会館などが、それに属した。男性の会、女性の会、青年会、少女会が生まれた。

ここで**平信徒が前面**にでてくるようになった。いわゆる「使徒職」とよばれる、民衆のなかからでた人がここで実証された。学問的教育を受けた牧師ではない手工業者、労働者、勤労者がディアコニーの養成の後にベルリンの都市伝道職に呼ばれるようになった。彼らは、ベルリンの市民と労働者と、まともに付き合い、話し、困窮と不安を理解した。

家庭訪問をすると、仕事の遅れを取り戻すことが最も強く心配されていた。この事業はあとでよりつよい福音主義の性格を受けついで。

多くの特別な活動が始まった。**夜の伝道**は売春婦を救おうとした。そのための娘と妻の避難所がつくられた。**辻馬車の御者伝道**は日曜日のない人たちのために尽力した。少年合唱団は、悲惨なとても暗い長屋の裏庭でもお金を集めてまわった。ここでもみことばの宣教がなされた。さらに拡大された活動は、長屋の真ん中にある質素なホールや集会室に、伝道にかりたてる信仰の準備ができた仲間と、伝道の準備ができた仲間たちを集めた。

シュテッカーは、週に一度「すべての人にとって一つの事件であった」金曜日の会議に、彼の協力者、視察官と都市伝道者その他の協力者を集めた。都市伝道者たちは活動報告をした。シュテッカーはいつも大都市の困窮に関する最上の情報をもっていた。

この都市伝道事業のための**年収**は初め1万1千マルクであった。これを20万マルクに増やすために、5年後には、7万8千マルクにした。シュテッカーは都市伝道に新しい友を得るために労を惜しまなかった。ベルリンではとりわけ女性協会が救援組織をつくった。プロイセン州では州の救援会が年に一度のお祭りを催した。皇帝の館ではかなりの寄付が集められた。マルク、ポンメルン、

東プロイセン、シュレジエン、西部-中部ドイツも持続的に寄付をおくった。そのように大きな伝道領域が、首都で、国内のもっと多くの仲間たちの関心事となった。

シュテッカーは、外国の友が喜んで立ち寄り、この方法で事業資金を援助する**キリスト教宿泊所**を、ベルリンにつくった。ついに教会総会は、ベルリンの都市伝道のために全ての領邦教会で一年間献金をつづけることを決議した。この活動の成果は明白であった。

まもなく他の大都市、中都市がベルリンを手本にして都市伝道を、一部は福音主義と、一部はカリタスの救援目標を共に掲げた。1887年にはドイツの27の都市伝道会がすでにあつた。1927年にはベルリン都市伝道は7人の牧師と30人の都市伝道者と5人の青年担当書記、4人の神学教師志願者と60人の都市伝道女性奉仕者として、12人のほかの仕事をもつ協力者をかかえた。[58]

都市伝道は多くの奉仕をしてきた。

第一次世界大戦前、社会民主主義者が要求し予想した、福音主義領邦教会からの大量脱退は起らなかった。このことは疑いもなく、都市伝道の犠牲をいとわない不屈の活動によると言うべきであり、その成果については社会民主主義の活動家もある種の尊敬を隠さなかった。

他方、都市伝道は労働者階層の宗教的・教会的荒廃がどういう状況であるかを示しただけでなく、道徳的な危険を伴う長屋の中にある非常事態を明らかにしたのである。都市伝道は、強い感受性をもつ反教会の人たちに、真のキリスト教を示し、またそのためにこの事業を援助する教会を励ますことができた。教会は避けがたい反教会運動を無防備でなすがままにしてはならなかった！ [58*]

また、もう一つの点で、シュテッカーはベルリンの教会の中に新しい道を選んだ。彼はベルリンに、どんなに教会と牧師が足りないかを知った。すべての州から、とりわけ東プロイセンとシュレジアから、100万都市になったベルリンに向かって何千もの人たちがどっとながれこんだ。この10万の人たちのために教会と牧師が足りなかった。**10万人になった巨大教区**に対してわずかな牧師が働き、その力を職務行為と堅信礼教育で消耗するというようなことは珍しいことではなくなった。

ベルリンでは**1870年と1890年の間に2つの教会が建てられた**だけであつた。シュテッカーは

1893年のシカゴ万国博覧会で伝道をした時、アメリカとドイツの大都市の間にある違いを見た。そこで、同じ期間に250の教会が建てられたのに、ベルリンでは2つしか建てられていない。これは、行動に踏み込んでいかない教会指導者たちだけの責任ではなく、ベルリンの都市教区を統治するのに、新しい教会と牧師に何の手段も認めないベルリンのリベラルな市民階級の人たちにも責任があった。

シュテッカーはまた**教会の自由主義に対する闘い**にも立ち上がった。積極的な小教区の会が援助して、ついに困難な10年間の闘いにおいて、都市教区に多くの積極的な人が得られた。1888年、ここでも教会建築を始めることができた。そしてなおうんざりするほどの困難があった。1890年、都市教区は少なくとも5つの新しい教会を次の会計年度内に建築するため、教会税を所得税の5.5パーセントから7パーセントにあげる決定をした。ベルリン市議会は賛成しなかった。ビスマルク自身教会税の値上げに反対して拒否権を行使し、その時、彼はシュテッカーの思うようにさせなかった。だがそれは新しい方向に進むことを阻止する最後の試みであった。都市教区は、一年して、ベルリンにおける教会税10パーセントの値上げを全員一致の決定によってやりぬいた。[59]

シュテッカーはドイツとアメリカを巡回する伝道者フォン・シュルムバッハに伝道のために数ヶ月ベルリンに来てほしいと頼んだ。このシュルムバッハの活動によって、ベルリンキリスト教青年会は、ビュクレル伯爵の指導の下にあるミカエル会のように、**営林監督官フォン・ロートキルヒ**を委員長として始まった。「**決然としたキリスト教青年同盟**」を創設した時の強い衝撃も同じように宮廷説教師から始まった。[60]

宮廷説教師を、大都市の社会的に最も困難な状況にある大多数の人と、親しく接触させた都市伝道活動は、彼を**政治への架け橋**とした。彼は社会政策の論争の舞台に上がった。

彼の提案によって1877年に辺境の牧師ルドルフ・トートの勇敢な本『**急進的なドイツ社会主義とキリスト教社会**』、それは「キリスト教の社会的価値と、キリスト教社会の社会的課題の叙述が新約聖書の研究を基礎にしてなされた」ものである。トートはキリストを「社会主義者」と理解した。また、彼は社会主義の本質的要素をなさない無神論を別として、社会民主党の社会民主主義全体は福音に矛盾しないものであると考えた。彼の

本は直接に革命的なものではなかった。というのはトートはキリスト教の国家思想にたつて、来るべき国家社会主義、福祉国家、また責任感のあるキリスト教の仲間が社会的混沌を静めることを期待した。改革は国と社会を支持するこれまでの人たちが始めるべきであった。福音主義教会は「国の良心」となるべきであつて、また「そのような活きた良心を、特に国とその立法を義と愛のキリスト教の霊をもつ同じパン種としてきよめるべきである。[61]

この本はオーソドックス教会の中では100パーセント拒否され、内国伝道中央委員会はこの本を敬遠し、『フリーゲンデンブレッター』は執拗にそのことを隠し通した。**ボーデルシュヴィンクの『家の友』**だけがこの本を、「工場主、牧師、新聞編集局、そして行政官」に、「極めて注目すべき読み物」として推薦していた。[62]

トートと国民経済学者アドルフ・ワーグナーとルドルフ・マイヤーによって始められた「**宗教的・君主的基礎にたつ社会改革中央協会**」にシュテッカーは短い期間入った。だがこの協会でなされた学術講演は宮廷説教師に満足できるものではなかった。キリスト教と教会からの下層階級の研究者たちの離脱も同じように手に負えなかった。シュテッカーは、時代のために、また王の宮廷説教師のために、思い切った決断をし、「**キリスト教社会労働者党**」を設立して政治の舞台に登場した。

「私を駆り立てたものは、私が底知れぬ深みにうごめいているもののなかに見た貧しい人たちをとりまく絶望であり、また、私が救おうとした人たちへの愛であった。・・・そこで私は祈り、願って、**社会民主主義の中に入って、野性の牛の角を捕らえて、これと闘うことを決心した**」。[63]

この動機をもってシュテッカーは彼の政治的な道を始めた。彼がその時、彼の党に説明した計画は、完全にすべて、後でシュテッカーの助けなしに実現された要求をもつ**真の労働者計画に従うものであった**。[64]

都市伝道会を引き受けた1年後の1878年1月3日、シュテッカーは、このキリスト教労働党を結成するために、代理人を通して公式の集会の開催を呼びかけた。これがベルリン市の北部にある大広間に名付けられた「**氷室集会**」が開催された。

シュテッカーは「氷室」集会のこの大会を、彼の人生で最も重要なものと考えていた。ここで彼は熱狂的した大衆の魔女の踊りの真ん中に、国民

集会のタバコの煙と乾杯のグラスが鳴る中に、社会民主主義の集会を指導する最大の社会民主主義労働者のもとにある、聖書台に進み出た。彼はたぐいまれな言葉をたくみに使うことが出来た。激しい演説合戦になった。彼は反対者に勝ちたいと思った。

「労働者の生活は守られねばならない。身体障害者も同様に世話を受けなければならない。寡婦や孤児もパンを食べるべきである。だが、このことはあなたの不幸です、私の主よ、あなたはあなたの福祉国家を思っておられます。人が改善のために、あなたに手を差し出すとき、人助けをしようとする時、その時あなたはあざけりをたしなめていう。『私たちは何も満ちたりた状況にはない。私たちは福祉国家を望んでいる』。それと同時に、私の主よ、あなたは他の階級を敵対し、すべてを憎んでいる。あなたは彼らの祖国を嫌われる。彼らの新聞にはこの憎しみが非常に燃え上がっている。それは悪いことである。ちょうど人が彼の母を憎むように祖国を憎んでいる。彼らはキリスト教も同じように憎む。彼らは神の恵みの福音宣教を憎んでいる。彼らは不信仰を説かれ、無神論を教わり、また偽預言者を信用している。・・・人の胸のうちに、神への愛と祖国への愛という最も高貴なものを殺すことが許されていなかった時には、労働党は実際に歴史的な意味を持っていた。・・・」

社会民主党のドイツ国会議員、製本屋のヨハネス・モストは社会民主党の最急進派の代表者、後のアナーキストであり、またアメリカで最後に役者となった、燃えるような雄弁で集会に集まったすべての人たちを熱狂させた。彼はその当時ベルリンで荒々しい煽動家であった。「宮廷説教師殿に感動している人たちの中に、目の前にある民の困窮を理解している人がいるのかどうか疑わしい」。「たとえ太陽が牧師たちすべてを暗くしたとしても、イナゴの大群が押し寄せるようなことがあったとしても」と、彼は恍惚となって叫んで言った。「社会民主党の労働者たち自身が、彼らの手段と目的を思いとどまらせることはしないようになった」「キリスト教の時代はあとわずかである。あなた方の勘定書は、あなた方の天と、牧師野郎と、あなた方の命の日数を計算している」。

[65]

「キリスト教社会労働党」の設立は、列席した労働者たちのほとんど満場一致で否決された。だが、設立は行われた。同じように1500人が参加

したもう一つの会議で、可決されようとしていた。集会を壊そうとした社会民主党員の出席者たちがついにフランス国歌マルセイエーズを歌いはじめた。すると、シュテッカーは「われらの神は固い砦」を歌いはじめ、彼の友と一緒にもう一つの表決によって勝った。

だが彼の新しい党と一緒に、社会民主党を撃退しようとする宮廷説教師の試みは失敗した。同じ年に皇帝暗殺事件が起こり、社会主義者鎮圧法が公布され、労働者たちがまず社会民主党員たちを貧しさの中に追い立てた。**新しいドイツ国議会の選挙で、シュテッカーは選ばれなかった。**

福音主義教会総会は新議長ヘルメスのもとで、国の組織全体として、ただちに社会主義者鎮圧法に賛成したのであるが、それにもかかわらず、国民の多くを占める「教会民」に第2の階級という烙印を押した。シュテッカーは彼らから叱責を受け(1878)、1879年2月20日の布告によって「一つの階層だけの利益を代表するようすべての公的な党の結成」をやめることを牧師たちに義務づけた。それはトートの中央協会もキリスト教社会労働党も同じことと思われた。

しかしながらシュテッカーは新しい集会でいつもキリスト教と教会、民族と祖国のために闘うように呼びかけた。翌1879年、彼はベルリンで表面的な成功に導かれた**反ユダヤ扇動**をはじめた。ベルリンのサロンには、宮廷説教師の雄弁に感動して熱狂した小市民と中産階級の信奉者たちが急に集まってきた。この「**ベルリン運動**」は、1881年以來「キリスト教社会党」とだけ呼んできたものを市民的なものに変えた。

ベルリンの貧民党は、プロイセン国の全領地で味方を得た。1879年、シュテッカーはミンデン-ラーベンスブルク(ビーレフェルト-ヘルフォルト)の選挙区で、プロイセン議会議員に選ばれた。1881年、彼の選挙区だけで勝利していた彼は、国会に選出された。ヴェストファーレンの信仰覚醒運動の2つの中心はシュテッカーのキリスト教社会主義の計画と重なっていた。またボーデルシュヴィンクの「家庭の友」も同じようにシュテッカーの立候補を支持した。

シュテッカーはボーデルシュヴィンクと共に彼の「**ユダヤ人問題の批判**」を共にし、それによってキリスト教社会党はシュテッカーが賛同した保守党内の反ユダヤ主義グループに対して、結集した(1880年)。

当時、ベルリンだけで45,000人のユダヤ人が

いたのに対して、英国全土に46,000人、フランス全土にはおよそ51,000人がいた。反ユダヤ主義は当時諸民族の間に広まっていた。しかしながら、ボーデルシュヴィンクとシュテッカーの否定は、ベルリンの自由思想の「**改革派ユダヤ教**」だけにいえるのであって、抑制のない、また(改革派ユダヤ教に)コントロールされた新聞によって節度のない近代的かつ腐敗した不信仰を宣伝し、またあらゆる方法で市場での主導的な地位を目指した。宗教的また道徳的に縛られていると自認している**敬虔なユダヤ教**に対して、シュテッカーはボーデルシュヴィンクと同様に異論はなかった。2人はその当時激しくののしる反ユダヤ主義宣伝によって人種的に、またほかの理由で、重要な役割を演じた愛国的なグループと自分を区別した。

シュテッカーに対して、200以上のユダヤ人のパンフレットがしばしば悪意ある態度を表明した。シュテッカーの反ユダヤ主義の闘いはより激しいものになった。ボーデルシュヴィンクはシュテッカーが新しいサロンで話すスタイルで行うようになった最近の動機の純粋なところをすべて承認するわけにはいなくなった。1881年から1884年までの彼の全盛時代に、宮廷説教師であり、護民官であるシュテッカーは、大都市の**近代的な不敬虔なユダヤ教**にたいして、容赦のない態度をとり、ユダヤ教はエホバに背いており、その群れはどちらかといえばエルサレムの街に住んでいる人たちより、エルサレムの街に多く住んでおり、彼らは預言者のかわりにまやかしの金箔の富で装っている。悪いのは彼らの神殿であり、拝金主義、下卑な代用宗教である。[66]

例えば、1883年シュテッカーがボックプロイライで、「ベルリンのユダヤ人と公共生活」について報告をしていたとき、次々にあらわされた賛意はこだまとなった。宮廷説教師、都市伝道の記者、教会の君主的-保守的政治家であり、アジテーターであるシュテッカーは、この年「魅惑的で有力な立場」にあった。

だが、彼らはすでに目的を心得た敵対者によって徐々に名声にダメージを与えられるようになった。「キリスト教社会党」の指導者、憎む人の多い男、シュテッカーは、自由思想のユダヤ教と自由主義思想が合わさった人たちを扇動する野獣となった。その時、社会民主新聞は支持した。彼は訴訟に巻き込まれ、職権による調査で、罪でないことについて彼の陰口をたたくようになり、生活全体をすみずみまで調査されて疲れてしまった。

「信心家ぶっている人・シュテッカーのような人」をけなし、また『クロイツ新聞』や『フォルク』のすべての派閥や、シュテッカーとアルフレッド・フォン・バーデルゼーから、皇后にいたるまでをさして言うのであるが、ビスマルク侯のジャーナリストたちはついにかれらの目的を達成した」[67]

皇帝ヴィルヘルム1世は、1885年、彼の宮廷説教師シュテッカーに対して、すべての公的政治活動を禁止した。「私が公的に発言しなければならない時、私は宗教的、愛国的、また社会的な話題だけを語るようになり、ついにはキリスト教と教会と内国伝道のばあいには当てはまるかぎりにおいてのみ話すようになった。[68]シュテッカーは反ユダヤ主義の闘争目標を断念しなければならなかった。

皇帝がシュテッカーを完全に見捨てなかったのは、王位継承者の長男、皇太子ヴィルヘルムが、彼の祖父に手紙で願ったおかげである。ホーヘンツォレルン君主国の忠実な闘士はこの人を見捨てさせなかった。ヴィルヘルム1世は、彼の愛する孫に譲歩した。シュテッカーは最高宗務会議から「注意し自制するよう」に訓戒をうけた。

皇位継承者である後の**皇帝フリードリヒ3世**も同じように、キリスト教の社会的問題の取り組みに悪い感情をもっていた。ここで脅かされた友人のために尽力した騎士のようなボーデルシュヴィンクは、皇位継承者と交渉した。1885年8月22日、ボーデルシュヴィンクが皇位継承者に書いた次の手紙は重要である。

「私はどうも信じられない。シュテッカーは過ちについて責任がなく、また多くの点で彼の活動方法と一致していない・・・彼は(社会民主主義に対する勇氣ある闘いによって、進歩党の怒りを支えて、私たちの国民の最もよい真髓を搾取している株取引のユダヤ人への怒りを負うことになるということを全く予想していなかった。シュテッカーは賢くなかったし、計算もしなかった。彼はそのことが私にとってなんになるのかとか、私がそのことで何をがまんすべきかなどと問うことは決してなかった。そうではなく、いつもあなたの義務と、神の意思は何ですかと問うた。・・・シュテッカーはユダヤ人の宗教を決して攻撃しなかった。そうではなく、反対に先祖への信仰を捨ててしまっている、また背教したキリスト教徒と一緒にいない、十字架と王冠、そして祭壇に対し、憎しみをもっている、宗教をなくし

たユダヤ人だけに反対していた。・・・皇帝と国に対して全き忠誠をもつ数千の、それどころか百万人のドイツ人がいることを私は断言してもよい。また私たちの皇室はおそらくシュテッカー以上に、勇敢であったり、献身的であったり、どうしても必要な、僕、また戦士ではありえないという、私の確信を分かち合ってもよい・・・。また同様に私たちは次のすべてを信じている。すなわち、シュテッカーが足を踏み入れた戦場で、キリスト教と社会の将来に決戦の場となるということ。また仮に戦いのなかで軍旗が傾くようなことになったとしても、彼は高められ、キリスト教のドイツ帝国時代となり、また私たちの敬愛するホーエンツォレルン家の時代になって、神が恵みの内に守ろうとしておられるすべてのことを私たちは信じている」[69]

シュテッカーは一時的に救われた。2年後の1887年10月28日、シュテッカーも助言を求められて、有名な「ヴァーデルゼー集会」が召集された。

皇太子フリードリヒの死の病は暗い影を落としていた。後の皇帝ヴィルヘルム2世、ヴィルヘルム皇子に指輪がはめられた。人は彼にベルリン都市伝道を知らせた。社会問題がどんなに彼の心を打ったことか、また彼がベルリンの労働者の困窮を和らげようとする誠意をもったことを人は知った。

これに関して、皇太子夫妻はちょうど1887年11月28日、大臣、国会議員、廷臣、またプロイセンの教会指導者たちによって選ばれた人たちを、参謀本部のヴァーデルゼー伯爵のところで行われる予備協議に招いた。ここで皇太子はキリスト教-社会主義思想に明確に賛意をあらわして、出席者を驚かせた。シュテッカーの都市伝道との親密な関係についての一件は予想外であった。将来の皇帝は、出席している4人の貴族のメンバーに、都市伝道とそれに似た事業を大々的に援助する「協会設立委員会議長」を引き受けるように指示した。

1888年5月28日、初めはベルリンで、もう一つはプロイセンの大都市で、また工業地帯で、現行のあるいは新しく設立された都市伝道が労働者を援助しなければならない「福音主義教会援護協会」が公式に設立された。同時に彼は資金の準備を通して、至るところで、大教区を縮小して組織立った教会の援助を確保しようと思った。助任司祭、教区助手を任用してもよかったし、教区会館

が建てられるようにもなった。後援は後の皇帝で後継者アウグスト・ヴィクトリアが引き受けた。

救援会は宮廷社会に定着し、みごとに組織され、「7桁の金額」をこえる資金を使うことができた。皇太子妃の侍従であり、宮内庁官フライヘル・フォン・ミルバッハは親しい委員会の中で、熟練した廷臣、真の主要人物になった。さらに多人数からなる委員会の中でボーデルシュヴィンクもおなじように選ばれた。ボーデルシュヴィンクはここで、とりわけベルリンの地で新しい教会と牧師職を設けるように求めた。教会建築特別委員会が出来て、そこから1890年5月2日、「ベルリン福音主義教会建築協会」が生まれた。

ミルバッハはここでも主役を演じた。「高貴な商業顧問官」という称号授与と引き換えに、豪華な新ロマネスク様式の教会建築のための資金をあちこちから集めるようになった。教会建築協会に所属しなかったボーデルシュヴィンクは浪費された莫大な金額にため息をつきながら同意し、シュテッカーは彼を迫害したミルバッハの敵意に、哀歌を歌っていた。

皇太子ヴィルヘルムが、ヴィルヘルム2世として王位についた時、彼は君主制を敵視する社会民主主義を撃退するために、社会福祉の立法をするように激しくせまった。ドイツ人労働者は、君主制、キリスト教、そして教会に取り戻されなければならなかった。1890年2月4日、新皇帝は、布告の中で、内国伝道がヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン以来要求してきた国家社会主義を強化すると約束した。労働者の健康保護の更なる発展、労働時間の規定、経営者に対して労働者を十分に代表する人、国立鉱業所の整備、福祉の「モデル施設化」、そして十分な国の監視が約束された。そのことで、ヴィルヘルム2世とビスマルクが仲たがいをおこし、それに対して福音主義の仲間うちで、文化闘争以来、シュテッカーになかばあおられた敵対的気分が支配していた。

いまや内国伝道と中央委員会の主だった協力者たちは安堵した。ローマンは「忘れられない瞬間」よりも明確に社会情勢の素描を示した。彼らは「大きな社会問題に正しく対処する時」を逃していた。彼は新しい状況について「実際の社会改革の道は、まず、2月4日の皇帝の布告の中で予告された対策によって進められるであろう」と述べた。

ベルリンの教会監督は、1890年4月17日の長い布告で、古プロイセンの教会の牧師たちに、社

会的困窮に対する労働者の闘いに、それぞれ可能な協力をするように呼びかけた。労働者の組合は創設されねばならなかったし、また、労働者の集会で牧師たちは啓蒙的に活動し、内国伝道はそれを援助すべきであり、あらゆる福祉の努力をして「健康な労働者住宅を建てる会」のように、関わるべきである。社会主義者鎮圧法の時代に出された正反対の通達は、忘れられた。「労働者とその家族の経済的な福祉を求める要求は、その宗教的・道徳的生活の向上の前提でもある」と教会監督は言明した。

シュテッカーは「**世界は一夜にしてキリスト教-社会主義になった**」と安堵の吐息をもらした。彼は内国伝道のほかの多くの人と共に、このあたらしいヴィルヘルムの社会福祉政策の兆しの中に、国と教会と内国伝道のすばらしい協力がはじまると信じた。宮廷説教師は、一年前宮廷から公的な政治的影響力をもつ活動を封じられたあと、新しい社会福祉活動をはじめた。

卓越した重要人物たち、偉大な国民経済学者アドルフ・ワーグナー、定評のある福音主義労働組合の牧師であり指導者であるルートヴィヒ・ワーグナー、そして偉大な学者アドルフ・フォン・ハルナックと共に、アドルフ・シュテッカーは1890年5月28日、「**福音主義社会会議**」を設立した。社会問題に関するあらゆる方向は、福音主義の精神において、神学者たちと国民経済学者たちとのより広い学問的対話を基礎にして導かれるべきだった。[70]

キリスト教-社会福祉の案件は、ビスマルクの失脚後、最初の厳しい打撃にあった。皇帝の指示によって1890年11月シュテッカーは彼の**宮廷説教師の職を失った**。シュテッカーはカールスルーエのバーデンでおこなわれた保守党大会で、政治的演説を不用意にし、また反ユダヤ的な意見をさりげなく話のなかに混ぜた。ベルリンのフリードリヒ大公の苦情はもう一つの処遇を可能にした。ヴィルヘルム2世の致命的な欠陥が露呈した。ベルリンでも政治的な地位を失って不人気になってしまったシュテッカーは、人気をあげるためにためらいもなく解雇された。

教会評議会の反響が後に続いた。ミルバッハと福音主義教会総会の議長、フリードリヒ・ヴィルヘルム・バルクハウゼンは、退職した**宮廷説教師シュテッカーが、第3回定期教会総会で教会会議の幹部たちの中から選ばれるのであれば、皇帝の気に入らないことになる**とって威嚇した。他に

も侮辱が後に続いた。

キリスト教-社会主義が願っていることから見るとその結果はひどいものだった。ベルリン市民の運動はもう何も起こさなかった。そのかわりに、常に強烈な反教會的・反保守的な態度をとってきた急進的な反ユダヤ主義が頭をもちあげてきた。彼は1893年16人の国会議員と共に、国会に入った。そして、保守党が手綱を引くことはもはや出来なくなった。

ヴィルヘルム2世が重要なものとして予告した社会福祉政策への期待は、社会民主主義者たちの執拗な拒絶的な姿勢によって水泡に帰した。皇帝は過剰な自己顕示欲のなかで、敏感になり、彼がなす労働者保護法の整備のすべてを不満げに見守ってきた非常に保守的な工場主の人たちを一段と駆りたてた。彼の考え方によれば、家のなかで家長だけが望んでいるだけであって、彼らは労働組合と社会民主党、講壇社会主義と、キリスト教-社会主義を非難すべきものとは認めなかった。この経営者の代弁者は男爵の身分に昇格した有力な資本家の実力者、ザール州の精錬所で労働者の模範的な面倒をみたが本気ではなかった**カール・フェルディナンド・フォン・シュトゥム-ハルベルグ**であった。この階級の人たちは沈黙して先端で皇帝の信頼を獲得した。

破局がシュテッカーの政治的なライフワークの上に襲いかかった。外からの原因がそうさせたのである。彼の政治的同志、ハンマーシュタインは投獄された。シュテッカーは彼の手形偽造と彼の得体の知れない行状については、なにも知らなかった。しかし、彼は疑われるようになり、再び誹謗された。若き皇帝がビスマルクに反感をもつようにと望んだ1888年の「(火刑のための)まきの山手紙」といわれているシュテッカーの手紙は、社会民主党新聞『前進』に手渡された。

フリードリヒスルーにいたシュテッカーが帰ってきて、80歳のビスマルクの誕生日に彼がお祝いを言ったところで、この手紙が公にされ、シュテッカーは偽善者また陰謀家と思われた(1895)。[71]

皇帝は、彼に宮廷説教師の称号を取り消すように言い、教会監督は、すぐに1895年12月16日、牧師の社会的使命に関する最後通達で取り消し、「住民たちの要求に軽率に味方した」ことを非難した。シュテッカーを死ぬまで敵対者として追求した**皇帝の致命的な電報**が後に続いた。ヴィルヘルム2世は1896年2月28日ビーレフェルトにい

た彼の昔の家庭教師、枢密顧問官ヒンツペーターに電報で次のように知らせた。

「シュテッカーは、私が前から言っていたように終わってしまった。政治的な牧師とはばかげたことだ。社会的でもあるキリストとは誰か。キリスト教-社会主義とはナンセンスであり、思い上がりで狭量であり、2つのものはキリスト教と直ちに矛盾する。主の牧師たちは隣人愛を養い、共同体の人たちの世話をすべきであって、それと関係のない政治に巻き込まれてはならない。」

とぎれとぎれの、フリードリヒ2世時代のスタイルのこの電報は、1896年月にシュトゥム系新聞『ポスト』誌に皇帝の許可をえて発表された。キリスト教-社会主義の事柄は、ドイツ帝国の最も上の先端から公然と追放された。ボーデルシュヴィンクはすでに前から次のことを訴えていた。「彼（ヴィルヘルム2世）は、母から非常に大きな権力を相続した。このことは一人の皇帝としては大変重い相続分である」。^[72] そのうえさらに皇帝は無言のままであった。またその無言が元宮廷説教師を訴訟に巻き込んだ。皇帝は容赦なくシュテッカーを迫害し、死ぬ一年前は、牧師の権利を取り上げようとした。

悲劇が起こった。シュテッカーはベルリンの女性連盟の幹部から排斥された。その設立を快く思っていなかったベルリンのフリーデンスキルへの献堂式で、彼は発言を許されなかった。皇帝夫妻は、彼の出席を、この前提条件と結びつけた。内国伝道中央委員会だけが、彼の重要性を認め、また独立していた。シュテッカーは彼らから捨てられたのではなかったのである。

皇帝はビーレフェルトの近郊シュパレンベルグで、ボーデルシュヴィンクの施設を視察し、その一年後に、いわゆる「監獄法案」を出す予告した。その法案はどれも厳しい刑で脅かして「働きたいと思っている同胞の自由な労働をあえてさえないものであった」。これはその当時、発展し始めたストライキ規則に反する挑戦であった。だが、監獄法案は1899年6月の国会で廃案となった。

しかしシュテッカーは皇帝が予告してきたようには終わらなかった。シュテッカーの友人のなかで、最も誠実な元・州長官のフォン・クライスト・レッツォウは、先頭にたち、シュテッカーの支持者たちと何事にもひるまない人たちのための新しい説教壇と1,200の席をもつ、都市伝道会、または**シュテッカー教会**を建てた。そこで、シュテッカーは彼の死の一年前まで、殆ど毎日曜日、大き

な教会共同体の人々に説教した。その中に工場労働者が工場長と並び、女中が貴婦人と並んで座った。無数の若き神学徒に正しい説教奉仕の道をしめしてきたグライフスバルトのD.クレマー教授は、シュテッカーの説教を次のように評した。

「彼は証言できる。彼は祈ることが出来る。そして、彼は美辞麗句を並べようとはしない。そうではなく、すべては単純明快である。そして、すべては憐れみであり、すべては活きた泉からわきあがるのであって、器は食べるためのもので飾られる必要はなかった。彼はベルリンで完全な説教が出来る唯一の人である。」

シュテッカーがドイツで説教するところは、どこも、礼拝堂はいっぱいになり、多くの敵対者がすっかり一人の友に変わった。その後、彼は彼らの仲間となった。そこでシュテッカーは決して政治的目的と結びつかない彼の以前の政治活動に同意されなくなった説教で何回も勝利した。

彼の説教は1ペニヒで8頁の冊子に印刷された。この**配布説教**は年毎に版を重ねた。それは大都市の路上で、日曜日のない人たちに辻馬車の御者に、郵便配達人や工場労働者に配られた。数年もたたないうちに毎週の発行部数は10万に達した。シュプルゲオンとならんで、シュテッカーは彼の存命中に世界の最も大きい教会を彼のキリスト説教によって一つにした。

彼は最後の説教を1906年の永眠者記念日におこなった。その時、肉体の衰弱がおこった。その後なお、4分の1年を平穩に過ごし、1909年2月7日に亡くなった。彼のベルリンの人たちは、彼を一人の領主のように墓に葬った。

いろいろなことが、シュテッカーを、人間的な、あまりにも人間的な人にした。彼は皇宮の輝きから遠く離れてしまった。彼はすぐに人を信頼するところがあり、しばしば正しい人間洞察にかけるところがあった。彼は結果がどうなるかまったく考えずに反ユダヤ主義的発言をした。またキリスト教-社会主義宣伝の中に彼の口調を混ぜることはよくないことであった。彼が得た成果はやすっぽいものであった。それがやかましい大衆の中で論じられなかったとしても、彼が心配していたことは、当然重要なものとなった。

シュテッカーは、ヴィルヘルム2世のもとでもビザンチン様式に変質しそうになって君臨している国教会の弱さを知っており、しかし他方では、シュタールや、フォン・ゲルラッハが彼を引き合わせたように、キリスト教の特性が保守

的-君主的国教会の思考範囲を脱していかなかったことは悲劇的なことであった。シュテッカーはキリスト教国家のこの幻を追いかけるほどナイーブではなかった。

「私は時には、教会が国民経済法を立法する力と責任を持っており、関税、租税、同業組合等の技術的問題をどうするのかということについて見解を述べるような立場にない。しかし、私はそうは思わない。キリスト教信者のすべての生活領域、公職にある人のすべての組織は、キリスト教精神が浸透するのでなければならないと思っている。というのは、人がつくった組織はなんらかの精神によって魂を満たされるものである。あなた方はキリスト教ではなく、非キリスト教のまたは反キリスト教の精神をもっている。キリスト教は政治を正しくし、すべての思想は社会生活を正しくかたちづくるためにある。」[73]

いずれにしても、シュテッカーは大きな目標をかかげて偉大な行動力、またぬきんでた才能を無条件に投入した。彼の神学的発言は私たちに多くのことを教えた。そうするうちに国家のかたち、社会の再建、政治、国民感情、経済、神学、すべてが変わってしまった。

彼のフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクとの変わらぬ友情は、2人の偉大な人物の神学の中に最も深い基礎を指し示している。すなわち、2人によると**全生涯の活動はキリスト教信仰を終末論的に伝えることができたのである**。私たちが働く目標、私たちの民族、私たちの国、世界、そして私たち自身は、このすべてをもっている。しかし、この世においてなす奉仕は、決しておわることのない国の、一人の主に対する不変の関係を持っている。」[74]

ここには、父ボーデルシュヴィンクがシュテッカーの死後に書いたように、つらいものではなかった彼の闘いの秘密も含まれたままである。

「私が今私の友をうらやもうとするならば、彼はおそらく恐れを知らない真理の告知者として、特に多くの不正に苦悩する神の闘士であるということについてだろう。」[75]

シュテッカーは保守的、君主制の基礎をもつ「キリスト教国」の思想にしたがって有権者の下でなされるキリスト教運動の助けを得て、「無宗派になってしまった国家」を新たに調整し、また国が支援する真の社会に対する「敵対者のゆるがぬ山」を除こうとした。彼は自由主義者の抵抗、ビスマルクの反対、またヴィルヘルム2世の分裂し

た社会福祉政策の抵抗にあって失敗した。それらは彼らを含めて、罪に対するどんな多くの国の法律も統率をみとめなかった。

彼の友人フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、「キリスト教国家」という思想を彼と共有しなかった。彼は、法はその民族の地域にいるすべての人に与えられるもので、彼らは内的・外的故郷を彼らの中に見出し、家庭を築き、労働に打ち込み、生活に責任を持って生きていくことが出来る「憐れみに満ちた」法を持つ国家を望んだ。

そこで2人は互いに歩き回り、イエス・キリストの共同の十字架の下で、互いに負い支えあった。彼らは上の教会が指示をしたからではなく、神からの召命を受けている人たちであった。彼らは困窮を手がかりに、心に燃え上ってくる内的衝動と、あたりを見回す注意い意志によって、使命へと向かった。

キリスト教社会福祉をめぐる闘い フリードリヒ・ナウマン

1900年の新年に**世紀の変わり目を祝う**公式の祝辞で語られことは、大変楽観主義に満ちたものであった。過ぎ去った世紀は最も誇り高い成果をのこし、最も偉大な人類の歴史を刻んだと確信された。そのおもな内容は、世界列強に対するドイツの精神的な高揚であった。ドイツは古い文化をもつ諸民族を価値あるものにした。数世紀の成果を回想すると、ドイツは自然科学と技術の結合を誇っている。この結合はこれから先も人類の生活水準を上げ、諸民族を向上させ、幸せにし、満ち足りたものにしていく。諸民族の平和的な交流の広がり、互いの世界を最も統一した親しみあるものとし、ヨーロッパ自身も今まで以上に強い国際共同体として理解されるようになる。

文化的楽道家のこの大きな合唱と比べると、かすかに聞こえる戒めの声があった。「福音主義ドイツ国民」に語られた**内国伝道中央委員会の新年のメッセージ**は、楽観的なものではなかった。「社会運動」の画期的な意味がはっきり表明されるようになった。「労働者階級の入党は、間違いなくキリスト教諸民族世界が集まってなす力より大きなものになり、与える影響は大きく、世紀を隔ててあらわれ、そこから生じる闘争の克服は上り坂の世紀があとに残した厳しい課題であった」「あらゆる面で大きな負債を負うこと」が忠告として強調

されるようになり、これまでの内国伝道の人たちより偉大な人が必要であるという声となった。その時「福音は私達の社会闘争の中に恒久平和が導かれるための救いの手段であるように、私たちの国民生活を健全にする唯一の手段である」[76]

この訴えは教会誌に掲載され、42万5千冊をこえて出版された。それは第1次世界大戦の恐れにおののいた14年の間、いたるところで前面に出てきた中身の無い**世紀の変わり目の楽観主義**に対して、心地よい対照をなした。皇帝の揺れ動いてやまない社会政策の中で中央委員会は社会福祉政策の-それはしばしば厳しいものであった-明確な線を堅持することができた。人はこれまでの線にふみとどまり、ずっと提案を繰り返した。中央委員会の組織の中で、社会の緊急事態と労働者問題についての連載報告が掲載されるようになった。社会問題は会議で根気強く議論された。ここで細部が扱われるようになった。しかし、教会全体を呼び覚まし、大衆の心を打つような大きな出来事は起こらなかった。

キリスト教国民労働運動は、こころよく受け入れられた。キリスト教労働組合は宗派を超えた基礎に立ち、反マルクス主義の基本的な立場に立ち、労働者の利益を代表する職能代表組合として1899年以来続いている。1903年に、キリスト教労働組合、福音主義、またカトリックの労働者協会、国家公務員労働者連盟、そしてドイツの商業徒弟組合はすでに62万人の労働者と従業員を、並み入る人々の中に数えることができた。キリスト教の世界観と愛国的な心情をもって、ドイツの労働者大会で協力する人たちの総数はすぐに111万2482名の会員を数えた。

中央委員会は、団体連合会といつでも連絡できる福音主義労働者協会をつくり上げた。彼らは同時に「自由教会・社会会議」との親密なかかわりをもった。

この会議は、1880年5月28日にアドルフ・シュテッカーとほかの人たちが創立した「**福音主義社会会議**」-シュテッカーは村八分にされ、その後、2つの議長の役を奪われて、そこを離れたのであるが、そのような分裂を起こした。

新しい「**自由教会・社会会議**」は、1897年4月27日にカッセルで召集され、福音伝道運動と福音主義改革運動、特にA. クレーマーやアドルフ・シュラッター、マルティン・フォン・ナトシス、W. リュッケルト等々の聖書主義のグループの神学者が参加した。ここで例えば、国民教会と福音伝道

運動、家内労働者婦人会、福音主義労働者協会、そしてキリスト教労働組合、堅信礼の改革等のように、とりわけ現実的な教会の問題が話題になった。

アドルフ・フォン・ハルナックが指導した**福音主義・社会会議の活動**は、社会的・倫理的問題を理論的に討議したり明確にすることに反対し、それにかわって農業労働者問題と女性問題を取り扱った。

この福音主義・社会会議は、新世紀初頭に大きな2つの労働者のストライキを全キリスト教的・社会的な仲間たちを深いところで呼び覚ました。「ザクセンのクリミトシャウにおける紡績労働者のストライキ」(1903/04)は、1日10時間(労働)のために闘うようになった。1905年の20万人の労働者が行った**ルール**のストライキは1日8時間の労働(時間短縮)のために闘った。2回のストライキは労働者たちに直接の成果をもたらさなかった。

だが、ここで問題は、「教会の前にも、またキリスト教社会党の前にも、どちらの側にもつきつけられたかのようなのであった。クリミトシャウでは、牧師はみんなその地の工場主の側についていた。いったい「超党派」という「牧師の中立」ということがどこにあるだろうか？ 労働運動が根本問題を訴えているのに、教会はちっともはつきりしなかった！

ルール地方の労働者ストライキの際、福音主義・社会会議の活動委員会は困窮を和らげるための救援物資の準備をして参加した。実行しなければならぬ時に、中央委員会は社会問題の告知を出したのであるが、そうした告知であって、このことは全体がはっきりしない中で希望の光であった。

ハノーバーにおける「ルール地方の労働者ストライキ」の直後に開かれた福音主義・社会会議は次のことを満場一致で確認した。即ち、労働者の組織は「私たちの経済のために必要不可欠のものであって、私たちの文化にとっても意味深いこと」である。[77] というのは、**二つのストライキ運動の積極的成果**は、自由労働組合とキリスト教労働組合の会員数の増加が反映されている。とりわけ、南ドイツでは増大する社会民主主義は自由・キリスト教労働組合の展開を目の当たりにして、オーソドックスなマルクス主義の鎖から解放するだろうという、必要以上の期待があった。南ドイツの諸国では1900近い民主主義的な選挙改革が実現した。変化が始まるかと思われた。

いまや指導的国家プロイセンは3級選挙法によって議会の連帯責任を完全に遠ざけ、広範な大衆をしっかりと守った。ヴィルヘルム2世は、社会主義工業労働者がこの国を楽しい国とし、その後、目を覚まし、この国を自分の国であると気づく機会を完全に逃してしまった。

第1次世界大戦前に内国伝道が取り組んだ最後の仕事はベートルの**福音主義・社会学校**であった。

団体連合会の指導者ルートヴィヒ・ヴェーバーは労働者階級から福音主義労働組合の事務官のような労働者協会の将来の指導者が養成されるために福音主義労働者協会を創設した。**福音主義労働者運動**は政治にあとあとまで影響を及ぼすことはなかった。1912年の国会に、110人の社会民主党国会議員とキリスト教社会党員が3人だけいた。

この経験は、内国伝道にいる若き神学者の中で最も自立的で最も天才的な人をついに政治の中につれてきた、その人は**フリードリヒ・ナウマン**である。1860年5月28日牧師の子、フリードリヒ・ナウマンはライプツィヒ近郊のシュトルムタールで生まれた。ラウエスハウスにおけるヴィヘルンの活動は、若き神学者を強くひきつけた。彼は1883年そこに助手の長として入った。彼はここで社会教育の力がわかるようになった。1880年にツビカウの近郊ラーゲンベルクにおける彼の最初のザクセン人牧会を受け継いだ時、人を導く彼の偉大な才能が直ちに証明された。死んだ教区がよみがえった。牧会的また国民伝道の責任感が彼を彼以前のシュテッカーのように社会福祉の中に導いた。工場労働者と直接に出会って、彼の最初の意義深い著書「**労働者のための教理問答か真の社会主義か**」を出版した。彼は情熱においては、ベルリンの宮廷説教師に似ていた。

「ここで何千人もの人たちが、一晚遊んで、だらしない女たちに浪費している、他方、縫い子たちは時給8ペニヒのために疲れた目をし、やつれた自分の指で夜の2時まで働かなければならないのである。経済的公平を求める叫びが鳴りやまない。民の中で行われている公共の売春を禁止するために労しなければならぬ。あなたはパンを求めて叫ぶ人たちの口を閉ざそうとするのか？あなたは金持ちの門の前にいるラザロに、命じないだろうか。金持ちがどんな日にもすばらしく、友達の中で生きてらよいのだと教えなかった。そのことを知らせようと思わないか？」[78]

彼は、1891年9月、フランクフルト・アム・マ

インに内国伝道協会の牧師として招聘された。彼は、ここでシュテッカーと同じくらい人を魅了する才能を評価された偉大な雄弁と彼の文筆の才能をしめした。シュテッカーと並んで彼は福音主義社会党会議を指導した。1891年彼はフランクフルトに福音主義労働者協会をつくり、福音主義労働者協会の内部でたちまち指導的地位についた。ナウマンは社会民主主義が「福音主義教会の最初の偉大な異端」であることを発見した。彼にとって、社会民主主義は終点をキリスト教・社会主義にあるとする「ひとつの通過点としてのみ」であったのである。

天才的なナウマンは**キリスト教・社会主義の使者から、キリスト教に基づく国家社会主義の使者**へと成長した。キリスト教社会主義の牧師にとって、「政治的牧師とはばかっている」という意味のない皇帝の発言は、真に効き目をあらかず結果になった。国民社会主義政治家に変わったキリスト教社会主義者の牧師ナウマンは、1907年に国会で左翼自由主義者の国会議員となった。しかし、**100万人の社会民主党の選ばれた労働者は、いつまでも彼が宣伝する目標にとどまった**。彼の目標は社会主義国家であった。社会主義国家はすべての福祉課題を引き受け、またここで社会福祉の思想を守った。

社会に関心を持つキリスト教は、社会民主主義を唯物論から引き離すことに成功しなかった、そこでナウマンは労働者が真の国民的国家思想の仲間になることを望んだ。この方法で彼は彼を否認から導こうとした。彼は彼自身の戦いと活動の時代の30歳台という男盛りの時に、進歩的人物であると同時にヴィルヘルム時代の囚人という一つの倫理的キリスト教の基本にとどまり続けた。

「今日の多くのキリスト教徒は彼らの理想を過去の日々に持っている。このことは重大なことであるが残念ながら本当のことである。私が教会におけるロマン主義と呼びたいものは、古い時代の観念に帰っていく。あなた方がカールマルクスを無視するのであれば、あなた方の目を閉じよ！と若者たちに大声で伝える、その人は、正しくて愛する人を教育できるが、しかし、目前に迫った闘いのために、十分に厳しくできない。私たちは最後には何を勝ちとろうとしているのだろうか？もちろん今日はすでに社会民主主義者であるが、また明日になるだろう。まさにこの民である。私たちが、ちょうどその時、この国民とその新聞、冊子、集会を私たち自身が体験してこなかったなら

ば、私たちはどのようにしてこのことを知り得るだろうか？」フリードリヒ・ナウマン。[80]

フリードリヒ・ナウマンは、それによって労働者の世界がこの国で成長し、彼らが生きながらえていくような、古い君主制を社会主義の精神で満たそうと思った。彼らが彼ら自身の弱さに陥った時、彼は新しいヴァイマル共和国が、労働者階級との活気に満ちた協力関係の中でよい将来を築いていく社会主義的愛国的、そして民主的な市民階級のために、真の故郷を用意するように望んだ。

だが彼はベルリンのドイツ民主党第1回党大会で党の役員に選ばれたばかりの1919年8月24日、60歳で亡くなった。彼の精神を「彼の弟子**テオドア・ホイス**は、彼の連邦大統領であった10年間にドイツの歴史の中に受け継いだ。」[79]

内国伝道の人たちがヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンの線の中でフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクとアドルフシュテッカーを越えてキリスト教社会主義が関心事と課題を彼らの民に委ねたところのものが、フリードリヒ・ナウマンと言う人物の中に余韻を残している。彼は彼らと共に**外面的な成功**に欠けているところを分かち合った。ドイツ社会の発展途上で直接証明できる効果をたやすく読み取ることはできない。しかし、この先任者たちのようにフリードリヒ・ナウマンはあらゆる方面の数え切れない人たちと生きた実り豊かな関係を作り上げることに成功した。ナウマンは、何ものにも左右されない誠実さ、それが福音主義的な気風を生み出すよりもっと大きな友人のグループと弟子たちのグループをつかっていった。

ベルリン東部の労働者宿泊所に、イギリスを手本にして1911年社会共同事業体を創設した**ジークムントシュルツェ**牧師の勇敢な働きも忘れられてはならない。彼はかつて労働者の信頼を得ようと試みたことがある。すべての学部出身の若き協力者は労働者住宅に住み、青年労働者を会館に、大人を話し合いの夕べ、母の夕べに、そして民衆教育事業に集めた。

都市伝道の意味での福音的事業は断念された。この事業は党の政策上は中間的で宗教的超教派的なものにとどまった。だが、それは- それと同時に、教会の良心と市民階級の良心が、共に彼らの社会的義務を深めるために、-キリスト教慈善の倫理観を吹き込み、疎外された国民階層の間に新しい道を切り開こうとした。

カトリックの側ではキリスト教社会主義が、プロ

テスタントが労働者問題に関する取り組みで得た以上に、先に進んだ認識を得ることはなかった。好戦的な**マインツの監督ケットラー**と**教皇レオ8世**は、そんなに新しい道を進まなかった。彼らはカトリックの基本的イメージの内部にとどまり、カリタスの提案を超えていくことはなかった。カトリックの側でも同じように総主教が福祉を開設して社会的傷を治そうとし、また非常に遅れて新しい権利をもつ労働者に助けられなければならなかったことを初めて知ったのである。ここで、即ちビスマルクがカトリック教会を巻き込んだ文化闘争の時代にキリスト教社会党、労働者協会の創設を始めた。彼らははじめてカトリックの中核的党の中でどうにか先に進みそして目が開かれてわかってきた。

社会的教説についてのカトリックとプロテスタントの間の違いは間もなく明らかになった。「キリスト教社会主義」のカトリックの特徴は、まったく教会法と自然法の中に根を張っていた。「キリスト教社会主義」の福音主義的特長は、労働者に人間の尊厳と人間にふさわしい存在条件を闘いとらなければならない、全く救われたキリスト教徒の個々の慈善を行わなければならないという責任に根ざしていた。

同様に1891年5月15日の**教皇の回勅**は、1864年のマインツの監督ケットラーの「労働者問題とキリスト教」についての文書のようには何も示してはいなかった。「また彼らは労働者にカリタスの援助物資ではなく、労働の新しい権利と労働条件の取得を助ける核心をとらえてはいなかった。

だが教皇レオ8世は社会問題の変わっていく重要性を認識し、ローマの世界教会にそのことを警告しようとした。これまでここで論じようとしていることが、どの程度成功しているだろうか、または成功していないだろうか。**プロテスタント世界の優位がはっきりしているわけではない**

カトリックの社会改革者と福音主義(社会改革者)が一致したこと、実際に健全な社会秩序はキリスト教の力がなくてもよい、とにかく、反キリストの前兆が現われないようにするという共通の確信である。

レオ8世は教会の指導の下で、国と社会の労働者と雇用者の労働者の福祉と労働者の自助の共同作業をする社会福祉の考え方を、同時に真のカトリックの意味において、正しく調和するように求めた。19世紀とヴィルヘルム2世時代におけるプロテスタントの社会福祉理解は「**神の助けと自**

助、国の援助と、互助」を個々のキリスト教徒の人たちの全く個人的な責任を基本にしてなすようにと告げた。

カトリックの社会改革者たちが彼らの教会について考えたより以上に内国伝道の人たちが控えめに考えた福音主義教会の社会福祉的誠実さはその時個人的に成長する個々の良心の回路の中にあった。

5

第1次世界大戦にいたるまでの 内国伝道の発展

帝国における内国伝道の更なる発展をたどると、活動の重点は要求の変化に対応し施設を整備したり改築したりして、継承されてきたディアコニー福祉の活動領域にあった。[81] 世界列強へと向かう第2帝国の成長と展開と結びついている新しい活動分野も掘り起こされていった。鉄道ミッションが設立された。それは福音主義女性の活動分野となった。「福音主義ドイツ鉄道ミッション連盟」部門は、1916年に275の鉄道ミッションを結成した。ここでは、とりわけ独身女性、母、娘、そして子供たちの支援を行うようになった。中央委員会は船員ミッションの必要性を繰り返し言ってきた。1893年、約16万人の福音主義の船員たちに対するこの活動は、ドイツ内国伝道協会を再認識させることになった。ベルリン都市伝道はシュテッカーの指導のもとで、1900年「河川と運河の船員のための教会の福祉協会」を創立した。1904年ベルリンで、一つのはしげが、日曜礼拝を守るようになった「海上教会」のために、つくりかえられた。その主な停泊地は、ベルリン西港であった。彼らはそこからそれぞれのベルリンの港に曳航されていった。その中で若い船員のカップルが結婚式をした。いくつかの船員の子どもの家が生まれた。そこで船員の子どもたちは学齢期を通して教育を受け、また学校の授業と並んで船員伝道者によって宗教の授業と堅信礼準備授業が始まった。[82]

日曜日の休みがないドイツのホテル従業員へのウェイトーミッションは外国で成長した。

1888年以来、ロンドンのドイツ人キリスト教青年会によって、ジュネーブのドイツ人ルター教会のアドルフ・ホフマン牧師によって、300人足らずのドイツ人ウェイトーが働いている(1890年)ベルリン都市伝道の早くからの協力者、の三つの

面から始められた。だが、最初は、カンヌのドイツ福音主義教会が、フランスのリビエラで1872-1908年から指導したヘルマン・フリードリヒ・シュミット牧師が彼の小さな本「ウェイトーの幸せと悲しみ」(1891)を出版し、ウェイトーミッションの共通の関心と呼び覚ました。イギリス、フランス、そしてスイスは、向上心をもって進むウェイトーのために、以前から高等教育をしてきた。そしてロンドン、ジュネーブそしてカンヌは、ドイツ人の地域に広がった海外ウェイトーミッションの海外センターとなった。[83]

ヴィヘルンが1856年アントワープではじめた船員ミッションも同様にドイツ海戦の拡大と共に拡充された。中央委員会はそれ(船員ミッション)をイギリス、スウェーデン、オランダ、イタリアの港でできるようにした。ついに第1次世界大戦勃発前に、200の港を受け持った。[83*]

キリスト教ホスピスは「故郷のユースホテル」の補充として、1860年よりドイツのいくつかの地方に生まれた。こうした働きが連合していく時の流れに従って、彼らは1904年以来、ついに200以上のホスピスとちょうど1万2千のベットをもつ1939の保養所が所属する独立した連合をつくった。内国伝道によって広まったキリスト教ホスピスの思想は、たちまちドイツ以外の国にも、とりわけスイスにまたスカンジナビアの方へ広まった。

1898年以来中央委員会にメンバーとして所属していたベルリンの神学教授ラインハルト・ゼーベルグの指導のもと、20世紀の初頭より中央委員会の護教的講演が実施された。毎年の講演では、信徒と神学者が内国伝道の全体の課題を割り当てた。この課題はすべての州と県の協会を組織していった。急進的な自然主義を説き、裸の自然への回帰、未開への、この世への回帰を語るニーチェ哲学が若者を捕らえてかく語った。「私はあなた方に誓う。私の兄弟たちよ、大地にとどまれ、そしてこの世を超えた希望についてあなた方に語るころのもの信じるな」。

そう言って、懐疑主義は教養人たちを脅かした。より明白なこの世の考え方であるヘッケルの世界の謎、ダーウィンの「存在のための闘争」、新しい権力神話は、最後の信頼を空洞化しようとして、まだ教会にいる大衆を幻惑した。

社会民主党からだけでなく、自由主義と進歩党に夢中になっている、他のすべてのことをもっとよくしようとする、もっと多くの市民階級の人た

ちから内国伝道に対する**世論の告発**がないわけではなかった。ここで中央委員会がしようとした説明と弁明は進まなかった。

1901年4月1日に発効した新プロイセンの「**未成年者の福祉教育法**」の中で、ついに内国伝道の希望はより考慮されるようになった。深く根を張った刑罰と拘束の観念は、今や教育思想によって制限されたり、もしくは解除されるようになった。内国伝道はそのために3世代前から努力してきたのである。刑事裁判官の仲間においても、同様に、新秩序は大衆の中に開かれていった。

その頃**青少年運動**が始まった。両親の家の問題と学校問題は、熱中した討論の重要な場面に移った。青年期にいる人は不健全で青年らしくない生活様式に反対し、また多くの死んだような知識の足かせを無理につけようとする学校制度に反抗した。人は青少年期固有の権利を認めてこなかった、19世紀の全く功利的な考え方に対して抗議した。この時は窮屈な通過の段階としてのみ、ただ大人になる準備の時としてのみ見られていた。あらゆる種類の学校で、一般に少年も少女も一緒にする型にはまった教育法によって授業が行われた。今日では、青春時代はその意味をもっているし、またその特別な意味内容に感激することも知られている。一生の中で14歳から18歳の青少年たちは、教育的な意味においても固有の権利を闘いとった。[83**]

この変化は少年刑法に影響を及ぼした。教育困難な古い救済事業の従来の子供たちは、彼らの教育事業の中で、あたらしい意識をもつようになりかされた。ここで、青年に教育扶助をなすため、ディアコニーによってとりあげられるようになった新しい偉大な課題が生まれた。兄弟の家は世紀の変わり目に向かって、力強く発展していった。

兄弟の家の発展を観察すれば、「弱い苗木から大木が生まれた」といえるだろう。たくさんの兄弟の家がドイツのすべての地区に、すでにあった。1833年のラウエスハウスや1844年のドウィスブルクのフリードナーの施設のように、古くなったものは、新しくされた。1850年に創立されたグライフスバルト近郊のツェッソウのツリコウ、1850年ナインステット、1858年ベルリンのヨハネシュティフト、1869年ハノーバーのステファン養老院、1872年モリツブルク、1876年カールスヘーエ、1877年ナザレ-ベートル、1881年マルティンショフ-ローテンブルク-ラシュニッツ、1883-

1945年カールスホフ(東プロイセン)、1890年ラムメルンブルク、1893年ノイエンドッテルザウ、1896年レームシャイト-リュットリングハウゼンのタンネンホーフ、1901年トライザのヘファータ、1906年ノイミュンスター近郊のリクリング、1907年フォルマルシュタインルールのマルチネウム、ドイツディアコニー協会連盟(DGD)、1909年に作られたマールブルクの兄弟の家タボル、1920年のファルケンブルクのルター施設、1912年バートクロイツナッハのパウロ院、1949年バートオェインハウゼン、ヴィッテ子どもの家、1954年アイゼナッハのヨハネス-ファルクの家、これらが新しく作りかえられた。

それぞれの特性は豊かに現れている。それらの地域の伝統の中に、埋もれていたものは、しばしばしっかりと形成された仲間によって継承され、教育思想はそれぞれの兄弟の家の中で、さまざまに形成された。また1904年以来、中央委員会の指示にしたがって、兄弟の家の管理責任者たちは、新しくされた会議に新しい問題提起をもって集まってきた。男のディアコニーの活動は、いつも活動の分野をひろげた。ディアコニーは、共同体助手、青年部書記として、合唱団指揮者として働き、また共同体の牧師職と教会のグループの管理センターの中で、内国伝道だけでなく、今はもう全く直接に、教会の奉仕の中でも活動した。彼らはたえず広がる活動領域の中で、連帯責任と自己責任を持つように指導的立場に呼ばれ、そして、直接に広い公共的な活動領域の中で働くようになった。彼らの準備教育で、その列から明らかになって出てくる要求は膨大なものになった。即興でやる時は終わった。

一般に、教会の代表者の前でディアコニーの試験を受けて終了する、5年間の念入りの理論的実践的職業教育をした。あとで職業につく上でこの科学的実践的な職業教育は非常に多面的で役に立った。授業も同様に古典語で、少なくとも新約聖書を原語で読めるようにギリシア語ができるようにした。いくつかの学校では、ディアコニーの試験に宗教教師試験を加えた。

パイプオルガン演奏者試験、福祉士の試験、看護士の試験、精神病看護士の試験、経営管理士の試験も受けることができた。さらに加えて、特別な職業教育も必要とされた。

そこで内国伝道と教会の内部に新しい職能階級が形成された。およそ50種の特別職が教会とミッションと国の領域で、ディアコニーを自由に使用

するようによできた。専門分野の課題は、はじめのうちはかなり程度までディアコーネンシャフトの活動によって形成された。ディアコニーというものは今もなお、次の3つの主なグループからなっている。即ち、教会ディアコン、援護ディアコン、そして管理部門のディアコニーのグループである。だが、ディアコーネンの側から、本来の使命である「言葉と行ないによる福音宣教」はいつも強調されてしっかり保たれた。それと同時に、才能と賜物の多様性は活動の創造性豊かな分野のためにとっておかれた。1913年以來、ディアコニーたちは自分たちの委員長を彼ら自身の系列から選び、「ドイツディアコーネンシャフト」の中に統合した。

中央委員会はディアコニーたちの社会的、経済的地位を高め、最低賃金を定め、結婚の緩和と俸給制度の大巾な統一をはかった。

そこでドイツ福音主義キリスト教界の内部に自立した新しい職業階層領域が生まれた。ドイツのディアコーネンシャフトは第2次世界大戦後(1962)6,000人のディアコニーのおよそ42%弱を飛躍的に増加させている。それは牧師不足を補うだけでなく、それぞれの州教会の中に要望を生じさせる「遅れて召される」ディアコニーたちに、牧師職の奉仕の務めを引き継いで行くようにするちょうどよい経験となった。

もちろん彼が第1次世界大戦前に「男性のディアコニーの将来は総じて内国伝道の将来を意味している」と言った時、内国伝道中央委員会はディアコニーの階層の人たちのこの経験を予測していた。男性ディアコニーとディアコーネンの歴史は、その意味で近代における教会のために編纂が待たれている。[83***]

他方、それぞれの事業が始まった。**俗悪な出版物に対する、反道徳的言動と飲酒癖に対する闘い**が、科学や芸術そして文学分野の人たちから繰り返し妨害されるようになったが、そのような人たちに期待する者はなかった。ここから内国伝道は、低俗な出版物によるドイツ文学の外国の過度な影響に反対し、1906年「福音主義書籍出版連盟」の中にしっかり合併した重要な歴史を指摘することができる、**福音主義出版業**と緊密に協力した。

[84]

アルコール中毒救援活動においては、イギリスからの刺激を受けてスイス人牧師ロハットが1877年にすでにアルコール中毒救援会を創立した。1883年**青十字節制協会**という名前で最初の協会が生

まれた。ドイツでは青十字思想を広めるためにロハット牧師とボヴェー牧師とりわけ**クノーベルスドルフの陸軍中佐クルト**が活躍した。この課題はすぐに内国伝道にも受け継がれた。

協会の会員たちは、協会の同意をえるために、(中毒)を告白したアルコール中毒患者の心をとらえようとした。アルコール中毒患者は青十字の会委員も自発的に自分達に課した厳しい禁酒を、署名して約束した。中毒患者たちは、中毒を克服するために信仰の仲間たちにやめることを約束し、それぞれが心からやめるようにながした。

ここで救援活動に、初めは互いに活動し、後で他の酒ざらい団体に戻っていけるように、さまざまな連盟が出来た。

ヴッパータール-バルメンにある教会の-中立的な「青十字中央協会」、「福音主義-教会青十字会ドイツ連盟」、そして福音主義改革運動内部の「クナダウエル青十字会」もそう見なさなければならぬ。内国伝道中央委員会は青少年保護のために飲食業法をつくる努力をして大きな功績をあげた。ここで政府、省庁、国会とよく話し合い闘いぬいていく問題となっていく。[85]

しっかり組織されたドイツの連中たち、とりわけ南アメリカに行く女子売買人たちに対して、重い懲役刑で脅かしてやめさせようとする、**恥ずべき女子売買**に対する闘いは、最後には「女子売買と闘うドイツ国民会議」に統合された。**ブレーメンのクンツ牧師**は、国際的共同事業を目指し船員ミッションを予防活動の中に引き継いだ。道徳に反する売春、そして飲酒癖に対する闘いは、更にすすめられ救援活動は拡充された。

中央委員会は、**女性の大刑務所**の女囚のために、ついに**女性刑務所看守**を雇用するという斬新な方法をとった。1891年刑務所業務での女性監視人を養成するところまでいった。女囚のための、こうした努力をして、釈放された女囚のためにすでに100を超える救援協会が出来たが、これらは1892年には「釈放された囚人のためのドイツ保護協会」に合併された。

身体障害者福祉は、シュテッカーが1879年ノヴァヴェスにあるオーベリンハウスを指導し、今はポツダム-バベルスベルクに任命されるようになった**牧師テオドア・ホツペ**(1846-1934)に1人の先駆者を見る。それと共に**ドイツ身体障害者福祉**全般において一つの障害があった。ここではほんの数年後に世界の目をひきつけた事業が始まった。ドイツだけでなく、日本に至るまで全世界に

模倣された手本があった。ホッペ牧師は、身体に障害をもつ人が社会の中で生活する力をもち、役に立つ一員となるように教育し、それと共に第1次、第2次世界大戦中に意外な重要性をもつことになった道を示した。

彼はスウェーデンを手本として1906年にドイツに**ろうあ盲ホームをノヴァヴェス**につくった。そこで彼らを今日までいつもかぎをかけて閉じこめていたと思われるいいようのない困窮に対する、終わりのない愛と忍耐の仕事は人間らしい生活の中で理解できるものになった。[85*]

女性問題も同じように内国伝道によって福音主義教会の中で再び動き出した。フリードナーは、女性ディアコニーと共に、未婚の女性が刑務所、病院、老人、子どもと、そして教会共同体の中での奉仕を創造的に行う方法を考え出した。そうこうするうちに、**女性の市民と労働者の運動**は、それぞれが目標をもつようになった。教会は、毎日繰り返される生活において、男女同権というよな、責任ある自立した協力関係を求める女性のブルジョワ的世界を、根本的に時代遅れの世界と見ていた。労働者階級の女性運動においては、教会は苦笑しながら観察するようなことはなくなり、目的を心得た闘いをするようになった。

内国伝道の人たちは世紀の変わり目を間近にして、再び精力的に教会の中で女性問題と少女問題に取り組んできた。ベルリンのエリーザベト教会の牧師**ヨハネス・ブルックハルト**は1848年から、内国伝道運動の成果として始めたベルリンの女性協会を、1890年理事会をもつ一つの連盟に、統合した。これは1893年**ドイツ女子福音主義連盟**を創設する合図であった。ベルリン-ダーレムに**ブルックハルトハウス**が生まれた。まもなく、18万5千人の会員をもつ6万5千の協会が合併した。ここですべての階層の少女たちの差し迫った問題は、社会的救済に至るまで福音主義の精神の中で取り扱われるようになった。ブルックハルトは教会内のすべての偏見に逆らい、責任をもって指導する女性協力者を養成した。巡回する女性書記が国中を旅し、教師講座と聖書講座を実施するようになり、余暇を調整し、職業女性の教育をほどこした。浮上する青少年運動の嵐の中で、このキリスト教の女子青年たちは、それぞれ固有の顔と使命感をもった。そのことについてはやがて青少年文学の時代が始まった。

1899年にはルードヴィヒ・ヴェーバーのような内国伝道の指導的人物によって同じように「**ドイ**

ツ福音主義女子青年連合」の中に、すべての階層の女性連合と女子協会と青少年協会の連合が、ドイツ民族の宗教的、道徳的再生のために、女性問題と女性世界の社会改革にとりかかった。ここでおよそ25万人の福音主義の女性がネットワークで結ばれた協会の中すみやかに集められた。地区の協会の実践的活動は、内国伝道と地方自治体の福祉活動のすべての地域で始まった。それは社会生活の中で連帯責任へと向かう福音主義女性にとって力に満ちた出発であった。

女性世界におけるこの全ての出発によって、アドルフシュテッカーは1904年ベルリンで**グレイフィン・ベルタ・フォン・デア・シュレンブルク**とあらゆることができたし、またチャペル協会の協力を受けて内国伝道の女子職業教育の最初の教育課程を開設することができた。成長する巨大都市ベルリンでは福祉と教会教育の課題のために、ここで教育された女子協力者が必要とされた。その中から1909年、中央委員会の協力の下に、ベルリンで「内国伝道女学校」が始まった。ドイツ福音主義女性連盟はすでに1905年にハノーバーで「キリスト教社会主義女学校」を始めた。

質素な女性、グレイフィン・ベルタ・フォン・デア・シュレンブルクは、彼女を尊敬し愛する少女たちに強い影響を及ぼした。彼女は、中央委員会75年祭において、ヴィッテンベルク城教会で神学の名誉博士を受けた最初の女性となった。

そこから**福音主義女性福祉連盟**と**内国伝道シュベスター**が生まれ、**内国伝道職業女性連盟**が組織された。中央委員会は彼女のために、ブランデンブルグのコーリン城の近くに、余暇と講習のための住居を取得した。コーリンの修道院跡でシュベスターの堅信礼が行われるようになった。

社会福祉女学校から**社会福祉学校**が生まれた。それは社会福祉にたずさわる人の学校（ゼミナール）とも呼ばれた。ここで女性福祉担当職員（ソーシャルワーカー）だけでなく、内国伝道の業務分野と政府の福祉を行う、男性福祉士が、健康と青少年とそして福祉事務所が、公共職業安定所が、家庭教育の中に、病院看護、工場労働者福祉、そして保養福祉、女性警官の勤務についても同じように準備されるようになった。

福音主義幼稚園女性教師、女性保母、青少年女性指導者は、1925年に最初の彼女達の連盟をつくった。[85**]

福音主義女性たちの福音主義教会における奉仕へのはじまりのなかで、アウグストヴィクトリア

皇后の提案によって1899年に「福音主義教会女性援護」としてつくられた「福音主義女性援護」団体連盟の創設もなされた。ここで、その使命を牧師職に関連してとりあげねばならなかった60万人の会員をもつ5千の協会を掌握する全教会共同体女性協会が生まれた。彼らは教会の女性たちを探して集め、共同体への奉仕の中で教育し、教会についての理解と社会における使命を語って励ました。これらの女性援護から自立したシュヴェスター連盟が成長した。教育課程と余暇が設けられ、海外にいるドイツ福音主義共同体に奉仕をするディアコニー母の家をつくった。

青年運動の問題は一度だけ、「**高等学校生徒のバイブルクラス**」が1909年に内国伝道中央委員会に加盟した時、内国伝道の門をたたいたことがあった。1883年、エルベルフェルダーギムナジウムの最初のバイブルクラスから生まれた聖書運動は、第1次世界大戦前の最後の年には300の地域で1000の高等学校に成長していた。[85***]

内国伝道は一般大衆の中で、1911年につくられた「**キリスト教を広める公共のミッションのためのドイツ福音主義国民連合**」の創設以来再び強められた。それらはシュテッカーによって創設された「教会社会主義会議」の提案によるものだった。

新しい国民連合は「その積極的なキリスト教の生命力がとりわけ公共の国民の生活のためにも達成と効果へと導く、一つの結合体になろうとした」。[86] 第1次世界大戦の勃発にいたるまでの数年、この国民連合はまっすぐ発展しなかった。中央委員会出版委員会から1910年に「**ドイツ福音主義出版連合**」が生まれた。「私達はその可能性を持っているに違いない。また新聞雑誌で公共生活のすべての日々の問題をキリスト教的道徳的世界観の光を当てて解明する。」という言葉をもってその必要性を説明した。[87]

ザクセン州の福音主義-社会福祉出版連合(1891)のように、あるいはヴェストファーレン州に(1907)創設された**地方出版連合の上部組織**として、ヴェルテンベルクの人(1877-1945)で、マスコミの中心地となった**アウグスト・ヒンデラー**の指導を受けて成長した。ヒンデラーは、何が成功できないのかという決まったキリスト教全体の考え方をする新聞雑誌をつくる闘いはしなかった。彼はその影響を狭くするかもしれないだけの「福音主義」日刊新聞を同じように育てようとはしなかった。新聞の中身にますます道徳が失われていくこと、奔放な行き過ぎを克服すること、問題か

らある特定の**福音主義奉仕が世論形成の担い手になっていく**ことが、問題であった。発展の歩みは出版連盟のこの活動目標の正しさを認めた。

[88]

同時に、膨大な教会出版事業はキリスト教雑誌と日曜新聞となって発展した。この関連で**福音主義図書館の設立**ももっと大きな重要性をもつようになった。すでに、ヴィヘルンはその必要性について言っていた。ここで、福音主義の著作と作者に磨きをかけ、教会共同体への入り口を見つけるべきであった。最初の福音主義図書館の中央機関は、1900年ベルリンに「キリスト教定期刊行物協会」を「国民図書館設立中央協会」の中につくった。3年後に内国伝道中央委員会が受け継ぎ、後には「ドイツ福音主義出版連盟」の一員となった「福音主義図書館連盟」が発展した。「**エツカルト**」の評論雑誌の創設、モデル図書館の設置、そして相談所は意味深いものであった。この努力の10年後に、ゲッチンゲンに教会図書館員が、職業教育をうける福音主義図書館学校が、つくられた。

内国伝道の種々の奉仕の**多様性と豊富さ**は、第1次世界大戦の勃発前に、細かく分かれている**37の専門分野の連合**となっていた。内国伝道の種々の施設と組織は、しばしば憐れみ深い町と村の全体を意味した。それらの福祉事業は、老人、病人、長期療養者、心の病、身体障害、盲人、ろうあ者、アルコール中毒患者、非行少年、孤児、ディアコニーの家とディアコニッセの家、キリスト教ホスピス、宿泊所、労働者コロニー、保養所、故郷を無くした人の避難所、船員の集会所、聖書学校、余暇施設、少年の家、幼稚園、数え切れないほどの豊富な施設があった。これらの奉仕の中には内国伝道の多くの職業活動家と、数え切れないボランティアの支援者がいた。ここで苦しみと孤独の大きな流れが、よき避難所に合流し、苦しみと罪責の世界の中でキリストの証をたてるようになった。

注

- 1 CA II 5頁以下
- 1* CA II, 7, 8, 12頁— Hanns Lilje, 「現代世界における慈善の課題」, Hamburg 1959, 8, 9頁
- 2 上記参照
- 2* H. Stephan, Hs. Leube, 「教会史ハンドブック」, 4. Band, 1931 II, 292頁以下
- 3 CA II, 17頁以下
- 4 上記参照
- 5 Walther von Loewenich, 「教会史」, 1948, 377頁以下
- 6 Kupisch 1, 86頁以下— CA II, 60頁以下
- 7 上記参照
- 8 Kupisch 1, 89頁以下— Kühne 36頁— CA II, 63頁以下.
- 9 Erich Freudenstein, 「内国伝道の制度と生成」 1948 (abgekürzt: Freudenstein) 50頁以下
- 10 CA II, 64頁— Kühne 35頁
- 11 CA II, 71頁以下
- 12 上記参照
- 13 Theo Pirker, 「前世紀の幻が問題である」, München 1961 (abgekürzt: 100 Jahre), 271頁
- 14 Hermann Klemm, Elias Schrenk, 「伝道者の道」, 1961 (abgekürzt: Klemm) 索引参照「シュレンクと内国伝道」
- 15 Klemm, 333頁以下, また299頁以下
- 16 Klemm, 407, 386頁以下, 421 或いは388頁— CA II, 148頁以下
- 17 Klemm, 390頁以下
- 18 上記参照407頁以下或いは390頁以下
- 19 上記参照421頁
- 20 上記参照422頁
- 21 上記参照411頁
- 22 CA II, 133頁以下— Ferdinand Schröder, 「祖国と異国の間の人、ヨーロッパの歴史における遍歴する人に対する国と教会の関係」, Stuttgart 1960 (abgekürzt: Schröder) 118頁以下或いは123頁以下
- 23 CA II, 164頁以下
- 24 Schröder 135頁
- 25 上記参照134 或いは137頁
- 26 上記参照134頁等々
- 27 上記参照128頁
- 28 Alfred Adam, 「フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク 1831-1910」, in: Via humana, München 1958, 195頁.
- 29 上記参照199頁
- 30 Georg Merz, 「教会がなす牧会奉仕」, 1952, 84, 78頁. (abgekürzt: Merz)
- 31 上記参照
- 32 200頁の注28参照
- 33 Martin Gerhardt, 「フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク」, 1. Band: Werden und Reifen, 1950— Ders., 2巻: 「全集前半」, 1952— Ders. und Alfred Adam, 2巻「全集後半」, 1958 (abgekürzt: Gerhardt I—111) — Gerhardt I, 191頁
- 34 Gerhardt, II, 191頁以下
- 35 Gerhardt, I, 412頁以下— G. von Bodelschwingh, 「フリードリヒ・ボーデルシュヴィンク」, o. J., 144頁
- 36 Merz 85頁
- 37 上記82頁以下参照
- 38 上記90頁参照
- 39 上記86頁以下参照.— Gerhardt, II, 571頁以下.
- 40 Gerhardt, II, 278頁以下und II, 532頁以下.
- 41 上記参照II, 281頁以下
- 42 上記参照II, 555頁
- 43 上記参照II, 560頁以下
- 44 上記参照563頁
- 45 上記参照2, 578頁— CA II, 81頁以下
- 46 Gerhardt II, 580頁u. a.
- 46* 上記参照II, 417頁以下
- 46** 上記参照II, 440頁以下, 473頁以下
- 47 上記参照11, 597頁— ABC 51頁
- 48 Gerhardt II 703頁
- 49 Gerhardt III, 225頁
- 50 Hs. Brandenburg, 「アドルフ・シュテッカー」, 1958, 89頁(abgekürzt: Brandenburg) — Adolf Stoecker, 「キリスト教社会主義」(1885) 1890-2: 「宮廷説教師の12年」, 1895, 「35年の説教、聖書日課におけるイエスの生涯」, 1909-2 — Dietrich von Oertzen, 「A. シュテッカー、生涯と現代史」, 2 Bände, 1919 — Friedrich Naumann, Gestalten und Gestalter, 1919, 106頁以下.— Reinhold Seeberg, 「A. シュテッカーの演説と論文」, 1913 — Paul Le Seur, 「A. シュテッカー」 1928 — W. Frank, 「宮廷説教師A. シュテッカーとキリスト教社会主義運動」, 1928 Ernst Bunke, 「A. シュテッカー、1938」 (abgekürzt: Bunke) — Karl Kupisch, 「アドルフ・シュテッカー、福音主義信仰と社会的責任における、課題-業績-遺産」, 1957.

- 51 Bunke, 10 頁以下
- 52 Zitiert nach Brandenburg 19 頁
- 52* 上記参照 24 頁
- 53 Schreiner, 339 頁以下
- 54 Heinrich Hermelink, 「フランス革命から現代にいたるまでの、人間性の歴史におけるキリスト教」, III. Band, 1955 (abgekürzt: Hermelink III), 10 頁以下
- 55 上記参照. 14 頁以下
- 56 Zitiert nach Brandenburg 67 頁— Bunke 81 頁以下. 「国教会自身が悪であるということは全く間違っている。教会はそのような国教会を変わらなくしたのではない。ヨーロッパには、そのなかで教会と牧師が自由を感じる、生きた教会がある。国は国家経営をより良くする外務行政によって教会と牧師の負担を軽減した。その結果教会はその固有の事柄に取り組んだのである。」
- 57 Zitiert nach Brandenburg 68 頁
- 58 Hermelink III, 168 頁
- 58* Erich Schnepel, 「東ベルリンからの便り」, 1. Bd 1935, 2. Bd. 1950. E.Schnepel はこの経験が 1920 年より後の報告からきていることを確認した。
- 59 Hermelink III, 169 頁
- 60 Brandenburg 80 頁— Hans von Saubertzweig, 「彼はマイスター、私たちは兄弟」, 1959, 479 頁以下— Karl Kupisch, 「ドイツCVJM」, 1958, 22 頁以下
- 61 Gerhardt III, 218 頁— CA II, 66 頁以下
- 62 Gerhardt III, 219 頁
- 63 上記参照
- 64 Kupisch II, vgl. Anmerkung 50, 69 頁以下— Kupisch II, 153 頁以下
- 65 Zitiert nach Bunke, 36 頁以下
- 66 Hermelink III, 298 頁— Gerhardt III, 226 頁.
- 67 Hermelink III, 299 頁以下
- 68 上記参照 300 頁
- 69 Gerhardt III, 232 頁
- 70 CA II, 83 頁以下— Gerhardt III, 246 頁— Hermelink III, 303 頁
- 71 Gerhardt III, 265 頁以下
- 72 Gerhardt III, 270 頁— CA II, 106 頁
- 72* Bunke 62 頁
- 73 Zitiert nach Brandenburg 63 頁
- 74 H. Schreiner, 「権力と奉仕」、アドルフ・シュテッカーの教会の自由のための闘い」, 1951— Schreiner 349 頁 (Krimm, 「教会のディアコニー職」の中にある)
- 75 Brandenburg, からの引用 90 頁
- 76 Franz Schnabel, 「19 世紀の拒否」 in: 100 Jahre, 191 頁— CA II, 109 頁以下— Kühne 36 頁以下— Freudenstein 54 頁以下
- 77 Joh. Rathje, 「自由なプロテスタントの世界」, 1952 (siehe Register) —Hermelink III, 320 頁 11. CA II, 115 頁以下
- 77* 「革命的階級闘争と SPD の中で、労働組合によって支持されたインタレッセン党との間の緊張は、特にそのスポークスマン G.フォン・フォルマーのもとで南ドイツの諸州の党で明らかになった。南ドイツにおいては、地方自治体と個々の国で社会民主主義労働者たちは、国に補償された学生自治会と同じように、成長し、具体的な体験と影響と力を得た。修正主義のグループの中では、カールマルクスの「科学的」テーゼは現在の経済的發展によって論破されるようになった。それと違って、党の最高首脳たちは、破綻した急進的マルクス教条主義に固執し、そしてほとんど活動せずに、マルクスの教えにより、資本主義社会の没落を待ち、そして、「窮乏化の理論により、窮乏化し、増加し続ける選挙人を信頼した。そこで帝国における社会民主主義政治は場合によっては孤立した議会のアジテーションさえも許すほどに教条的な硬直をした。ところが運動の実際の力は適当な影響力を帝国の政治に及ぼすことを怠ったのである。」 Vgl. RGG-3, Bd. VI, Sp, 154 頁以下
- 78 Herbert Hupka, Friedrich Naumann, 341 頁以下 ‘in: 100 Jahre — Theodor Heuss, 「フリードリヒナウマンとドイツ民主主義」, 1960 — Ders., Friedrich Naumann, 「全集、時代 (1937)」 1950-2 — Ausgewählte Schriften von Fr. Naumann, ausgewählt von H. Vogt, 1949 — M. Wenck 「国家社会主義の歴史」, 1905 — G. Bäumer, 「時代の変わり目を生きた人生行路」, 1933 — E. Thier, 「教会と社会問題、ヴィヘルンからナウマンまで」, 1950 — R. Nürnberger, 「F. ナウマンによる帝国主義、社会主義そしてキリスト教」 (Hist. Zeitschrift 170, 1950, 525 — 548)
- 79 Hupka S. 351 頁
- 79* 「Fr. ナウマンは全ドイツにある福音主義青年労働者教会運動に活力を与え、一方で内国伝道の協力牧師としてフランクフルトでの活動

を行った。彼の情熱は教会が行う宣教にあるのではなく、そのようなものとしての社会政策であり、アドルフシュテッカーとは違っていた。」

- 80 Hupka 343 頁— über Siegmund-Schultze: H. Maus, Fr. Siegmund-Schultze (ökumenische Profile 11/4), 1952— J. Rathje, 「自由プロテスタントの世界」, 1952 (siehe Register) — CA II, 117, 245 頁
- 80* Hermelink III, 285 頁以下.— RGG-3, Bd. VI, Sp, 202 社会改革 — 「カトリックカリタスの歴史について」: J. A. Fischer, 「現代におけるカトリックカリタス」, in: Krimm, 「教会のディアコニー職」 388 頁以下
- 81 CA II, 118 頁以下
- 82 ABC 43 頁以下
- 83 CA II, 139 — Joh. Steinweg, 「私の生涯における内国伝道と教会奉仕」 1959, 40 頁以下
- 83* W. Thun, 「ドイツ福音主義海員伝道の成立と発展」, 1959
- 83** Schnabe 200 頁, in: 100 Jahre — CA II, 121 頁以下
- 83*** CA II, 25 頁以下, 197 頁以下. — Steinweg s. o. Anmerkung 83, 11 頁以下. Vgl. dazu Anmerkung in Kapitel IV — Ernst Schering, 「時代の変化する世界の中でのディアコニー、ディアコニーの変遷」 Bielefeld 1958, 63 頁—男性ディアコニーの歴史は、大変望ましいものである。内国伝道の歴史はその発展段階の全体の中にあるディアコニーの歴史の中に描かれる。内国伝道のこの歴史は引き続きカリスマの持ち主の歴史から、男性ディアコニーと女性ディアコニー (ディアコニーシュヴェスター) のもとにあるように、神学者のもとにある。ドイツゲマインシャフト運動の中の兄弟の家の成立、St.クリスコナ、ヨハノイム、バーンアウエル、説教者養成学校、マールブルク・タボル兄弟の家 (Lahn) ノイキルへの Kr, Moers, Liebenzell, Hans von Sauberzweig, 「彼はマイスター、私たちは兄弟」、グラナダウ・ゲマインシャフト運動の歴史を参照 1959 S, 466 — 473 頁
- 84 CA II, 162, 164, 170, 186 頁—Hermelink III, 644 頁 「福音主義書籍出版」, 1961, herausgegeben von der Vereinigung Ev. Buchhändler, Stuttgart.
- 85 CA II, 166 頁—Ernst Bunke, 「クノーベルス村のクルト」, 1958
- 85* ABC 122 頁— CA II, 160 頁以下— Th. Hoppe, 「オーベリンハウス」, 1930—R. Kleinau, 「オーベリンハウスの 75 年」, 1940
- 85** RGG-2 „Frauenbewegung Sp, 742 頁以下— RGG-3 „Frauenbewegung“, Sp. 188 頁以下.— CA II, 188 頁以下.— Hermelink III, 643 頁— CA II, 283 頁以下—Ev. Kirchenlexikon, 1959, Sp. 1837 頁以下.— Joh. Steinweg, 「私の生涯における内国伝道と共同体奉仕」 1959, 85 頁以下— Christine Bourbeck, 「内国伝道福祉の 50 年」 in: Die Innere Mission, Jahrgang 1954, 332 頁以下. 「内国伝道学校の始まり」或いは「内国伝道福祉学校の始まりは 1904 年である。ベルリン・シュパンダウにあるヨハネシュテイフトにある最初のドイツ福祉学校は 1954 年 10 月 30 日に 50 年の存続を祝った」— CA II, 193 頁 「1909 年 10 月 13 日を開校の日と呼んで、その時、どうやら福祉学校の公式の引継ぎがなされていた。すでに『チャペル協会』と『少女の福祉協会』が中央委員会によって開設されていた。」
- 85*** CA II, 132 頁以下.—Hermelink III, 633 頁以下
- 86 CA II, 217 頁
- 87 上記参照. 183 頁以下
- 88 RGG-3 „Presse Sp. 5 5 0
- 89 Wilh. Brandt, 「ベートル、19 世紀内国伝道の歴史、ドイツ福音主義教会広報」 2. Jahrgang, 1948, 60 頁. 中央委員会歴代委員長 vgl. Ca II (Register) — Kühne 47 頁. (Friedrich Albert Spiecker (1854 — 1936) 卓越した委員長・人物であった)

訳者あとがき

本章がおわると残り 4 章は第二次世界大戦下、戦後の国家崩壊の中での福祉が、世界教会協議会の援助活動、エキュメニカル運動として展開し、さらに戦後ドイツの発展途上国援助へとなっていく。今回も西南学院大学教授河島幸夫先生にわからないところをご教示いただいた。感謝して御礼申し上げます。